

院、根岸病院、保養院の六院に轉院せしめた。

失火の原因は湯殿の残火説と、二階病棟の失火説とに別れた。

因に言ふ。此年二月には、米國マンハツタ州立精神病院に火災が起つて、患者二十二名、看護人三名を焼死せしめ、同じく十二月には、シカゴ州立精神病院が火を發し、患者十五名を焼死せしめた。

第八は、大正十三年十二月二十九日に焼失した青山腦病院（赤坂區青山南町五丁目八十一番地、院長ドクトル・メジチーネ齋藤紀一經營）である。

青山腦病院は、王子腦病院と同じく東京府代用精神病院に指定せられ、當時患者二百九十八名を收容した。此火災によつて、十六名の逃走患者と、十七名の焼死患者を出した。

警視廳は患者のうち公費患者だけを、府立松澤病院、戸山腦病院、加命堂腦病院、根岸病院、保養院、王子腦病院の六院に轉院せしめた。

失火の原因は、賄所に於ける餅搗きの残火からであつた。

第九は、最初に記した戸山腦病院の焼失である。要するに、精神病院の焼失は、前後九回といふ事になる。

### 殺人未遂の共犯として訴へられた私の經驗

大正五年八月十四日の午さがりであつた。

S 腦病院院長I醫學博士から電話で、

「今、君の事を検事局に告訴したとかいつて、イキマイてる人がある。その人から、君の病院の事を色々項目を並べたてて照會して來て居る。屹度、他の同業病院にも、同じ事を問合せて居るのではないかと思ふ。僕は何も回答の義務も責任もないから、そのまゝに抛つて置く積だが、またゴタ／＼がはじまると厄介だから、今のうちに、何とか妥協しては如何か。」と言ふのであつた。



I 博士は、私の父執で、又同郷人でもあつた。言ふまでもなく、私に對する好意から、警告を與へられたのであつた。

私は深くその厚意を謝した。が併し、私を告訴した人が、辯護士××××（以下假にAと稱す）なる事を聞くに及んで、私は愕然として驚いた。

愕然として驚いたのも道理である。Aは私が東京府第四中學在學時代の、同窓の友人であつたからである。私は暫らく、自分の耳を疑つた。勿論、博士の電話だけでは、Aが私を訴へた動機も内容も、又各病院に照會したであらうといはれるその内容の何であるかの片鱗すら判断する事が出来なかつた。併し昔の友人、Aが私を告訴したといふそれだけの事が、私をして茫然として自失せしむるに十分の價值があつた。

I 博士の電話があつて二日たつと、今度は〇腦病院長K醫學博士から、同様の電話に接した。

Aは中學時代の同窓である。Aと私とが、同窓の友人であつたばかりでなく、Aの父と私の父とは、一所に或會社の重役であつた事さへある。Aは中學を卒へてから、一時國學院に入學したが、一年ばかりたつと、神田の法學院に轉校した。私が仙臺の第二高等學校在學中、Aは早くも東京で、辯護士の看板をあげて居た。Aはさうした秀才であつた。

中學校を出てから、相見ざる事正に十七年、その間に、Aの心境にも、大なる變化があつたかも知れぬ。併し私の頭に蘇つてくるものは、昔のまゝのなつかしいAであらねばならぬ。

さうした古馴染のAが、私を告訴したといふのだから、私も事の意外に驚き、しばらくは五里霧中を彷徨するの感があつた。若し病院の經營者としての私に、何か不都合な行爲があると思ふなら、舊友たるAの立場としては、一應私に面會を求めぬなり、又面會を求めぬのがイヤなら、書面でありとも、其理由を示して、忠告を與へて呉れるのが、當然の順序ではないか。イキナリ裁判所に訴へたといふのは、チト常軌を逸しては居らぬか、精神病院などいふものは、どこでドンナ誤解を受けて居るかも知れない。此度の事もおそらくは、人道問題とか何とかいふやうな建前から、友誼友情を超越しての行爲であるのであらう。



私はさういふ風に考へた。それで、I、K二博士の好意には背くが、Aがさうした考へなら正邪黑白を、イツソ裁判所で定めて貰はう。私は省みて、身に一點の疚しい事もない。脛に傷を持つやうな事は、卵の毛程もない。俯仰して天地に耻ぢぬ。千萬人と雖も我れ行かむ。かういふ風に強氣になつた。

すると此事を聞いて、非常に心を勞した一人の友人があらはれた。それは、私の郷里で發行する新聞の、東京特派通信員佐藤日出弘君であつた。君は、Aが一體何を考へて居るのか。何が動機になつて、そんな事をしたのか。一つAに面會して訊いて見ようと言はれるのであつた。私は既に裁判所で烏鷲を争はうと決心をして居たのだから、一應は君の提案を辭退したが熱誠をこめての君の好意は黙し難く、暫く君の言ふがまゝに従ふ事になつた。君はその足で、Aを神田の家に訪ね、親しくAに面會して質ねる處があつた。九月二十三日の事である。

君が再び私を訪問せられた時には、其顔に微笑があつた。

君の語るところを要約すると、

一、Aは曩にB精神病院に入院して、最近に退院した。AがB病院に入院中、ヒドイ残酷な取扱を受けたといふので、B病院長を相手取りて、爆発物取締罰則第一條違反殺人未遂外四十二種罪に關して、告訴告發狀を東京地方裁判所検事正中川一介宛で出している事。

一、B病院在院中、Aは幾度も院長に退院を迫つたが、院長は絶対に承知して呉れぬ。承知して呉れぬも道理、AをB病院に入院させたのは、杉村幹で、院長がイクラ退院させようと思つても、杉村が、あの男を退院させないで下さいと言つたとの事である。聞けば杉村はB病院長の甥だといふが、僕とは中學時代の友人だ。甚だ怪しからぬ男だと恨んで居た。今度退院したに付、B病院長と併せて杉村を訴へた。病院長は、自分を殺さうとした殺人未遂でありB病院長にすすめて、自分を退院させなかつた杉村は、B病院長と共犯だと言ふのであつたさうだ。

そこで、佐藤君はAに答へて、それは飛んでもない勘違ひだ。



一 杉村は、君がB病院に入院された事さへ、知らないだらう。  
 一 杉村は、B病院長の甥などではない。B病院長とは、格別の交際さへないだらう。  
 一 従て杉村は、B病院長に、君の事を進言する道理はない。  
 と力説した處、Aは驚きの眼を睜つて、  
 「さうか、それは僕が悪かつた。僕は舊友たる杉村に對して申譯がない。逢つて謝罪しよう。」  
 と言つたとの事であつた。  
 私がAと下谷の旗亭に會見したのは、その翌日であつた。相見れば昔の舊友に落つ。そこに  
 何の怨恨もわだかまりもない。  
 「ヤア暫く、B病院長が僕の事を甥だなんてそんなトテツもない事を言ふはずはないぢやないか。君の妄想だつたらう。」  
 と私は言つた。  
 「イヤ慥に言つたよ。併し佐藤君に聞いて、釋然として了解したが、君に對しては全く腹切り

ものだ。許して呉れ給へ。」

とAは答つた。私は、

「解つて呉れ、ば何もいふ事は無いさ。唯、君はいろく僕の事を各病院に照會したさうだが、僕の名譽と信用恢復の爲に、取消しの手紙を出して呉れ給へ。それで僕は満足だ。」

と言ふと、Aは、

「それは當然の事さ。又告訴も直ぐ取下げるよ。誠に濟まなかつた。」  
 と答へた。

斯うしてAと私とは、昔の友情にかへつた。

X

X

X

雨降つて地固まる。

その後私は、病院に關する訴訟事件などがあると、すべてAに頼んだ。Aは本腰になつてや



つて呉れた。私が昭和二年の秋、病院の経営を罷めた時に、誰よりも親身になつて、心配して呉れたのはAであつた。今後はかうしたらよからう。こんな仕事を創めたらよくはないかなどと、兄弟も及ばぬ優しい氣持で、盡して呉れた。

Aは直情徑行の性質であつた。狷介孤高の素質であつた。辯護士として事件を依頼されても、相手方の辯護士と妥協したりする事が大嫌ひで、何でも彼でも、理非曲直を裁判所で争はうといふ一本調子の人であつた。従て金儲けが下手で、辯護士生活三十年、去年の四月五日に、五十五歳を以て、此の生を終るに至るまで、洗ふが如き清貧を以て一貫した。

Aは或時私にこんな話をした。B病院長が俺れの攻撃がやり切れなくなつたと見えて、花井卓藏博士を介して、俺れに和解を求めて來た。そして、告訴取下げの條件として、大金を提供すると言つて來たが、先輩たる花井さんが、此告訴は取下げると言はれるなら、俺れは花井さんの顔を立てて、告訴はクレイに取下げてもいい。併し現實に金で此俺れを買収しようといふ量見なら、俺れは死ぬまで告訴は取下げないよと言つてやつたよと、昂然として眩を張つた。

私は此真相は知らないが、如何にもAらしい言草であつた。俺れは金儲けが下手だ。考へて見ると、初手から此商賣には向かなかつた。イツソ檢事にでも爲つてた方がマシだつた。こんな事を口癖に言つて居た。畢竟己れを知る者は己れに如かず。その方が適材適所であつたかも知れぬ。

Aは草花を愛し、小鳥を愛した。彼の城南洗足池畔の小廬の三尺の庭には、西洋の花が爛漫として咲き亂れて居た。彼の小さい玄關には、小禽の籠が、いくつも〜重ねられてあつた。

Aは酒を愛した。酒は彼の生命であつた。Aの細君が私に話したところによると、或時Aに囊底一文も無く、今夜の米の一粒、鹽の一握りもないといふ極貧の場面があつて、一知人を尋ねて、五十錢玉一つを借りて、夫婦が顔を見合せて、ホット安堵の胸を馴で下ろした時でさへその中から、二十五錢を割いて、酒屋へ走つたといはれる位の酒徒であつた。

Aは一瓢を友として陋巷に顔子を學んだのであらう。萬葉の歌人は、この世にし楽しくあらば來ん世には虫にも鳥にも吾れはなりなむと歌つたが、Aの心境は、正に其通りであつたに違



ひない。Aは飲んで亂に落ちず、さうかといつて、クダを巻くやうな野暮を言はず、唯一圖にいい機嫌になつて、得意の伊豫節をうたふのであつた。昭和五年の春、麻布山元町の旗亭で君と酒杯を擧げたのが、酒席の人としての見納めであつた。

中學時代に別れて、魚雁を往來せぬ事十七年、其Aが、殺人未遂の共犯だといつて、私を檢事局に訴へた事が機縁となつて、更に水魚の交を締めたのは、まことに不思議な人生の際會であつたと思ふ。

AはB病院を退院後、其死に至る迄、別に其調子の變つた所もなかつた。

私は本書を上梓するに當り、此一篇を巻中に加ふべきや否やに就て相當に行き悩んだ。併し殺人未遂の共犯だといつて、舊友の爲に訴へられたといふ人が、何處の世界にあるであらうか。私は泉下の君が山羊髯をしていて、何を下らぬ事を書いて居るんだと、叱るであらう事を覺悟の前で、私の生涯のいくさりとして、此に書きとめる事にした。

私は此一文を草するにあたり、筐底を探つて、(一)Aが私の事について、各病院長に發した

照會狀、(二)AがB病院長にかゝる爆發物取締則違反、殺人未遂等の追告訴として、被告人の表示中へ亡父と私とを追加する旨の、檢事正宛の告訴狀中追加書、(三)Aより檢事正宛の(二)の追告訴取下書、(四)Aが亡父と私とが、B病院長の行爲と何の關係もない事が判然したので、追告訴を取下げたとの各病院長宛の通知、以上の四つの寫を見て、そゝろに當年を回顧し、無限の感慨に打たれた。思へば、何のあとかたもない根なしごとのために、馬鹿騒ぎを演じたAの心境も、亦奇なりといふ可きである。

以上四つの寫は、Aが自分用の訴訟用紙に自分で書いて、御詫のしるしだと言つて、私に渡したものである。その訴訟用紙の右には、孔丘曰君子無所爭必也射乎。左には、揖讓而升下而飲其爭也君子。天には、道之以政齊之以刑民免而無耻。地には、道之以德齊之以禮有耻且格と赤インキで印刷してあつた。

挽歌

酒のめばいのちたのしと常笑みし酒のひじりはほとけとなりぬ



酒をめで草花をめで小鳥をばめでし友なり佛となりぬ

### おそろしい顔の晝

私は前項に、女患者の蛇の幻視の事を書いた。他にも幻視のある患者は澤山あつたが、その中に一人、端麗花の如き少女があつて、それに幻視があつた。格子につかまつて、庭を通る人を眺めては、鬼が來た鬼が來たと、袖で顔を隠すのであつた。

曾て四國の或山里で、妹が氣が觸れて、野良仕事をして居る姉を、草刈録で斬り付けた。失心して傍に立つて居る妹に、何故こんな馬鹿な事をしたのかと尋ねると、姉の顔が、その時鬼に見えたからだ、ニヤリと笑つたといふ話を聞いた。

支那の小説などにもこんなのがあつた。進士の科擧に應じようとして居る儒生が、淨几の前で讀書をして居る。少し倦んだので、書齋の小窓を明ける。すると、花壇に咲いてる牡丹の中に、

曲眉豐頰の麗人が、端然として立て居る。オヤと思つて熟視すると、それは、十年前に他界した自分の戀人であつたといふやうな綺麗な幻視が渦を巻いて居る。

併し私の病院に居た患者は、さうした美的のものでなく、何時でも、蛇とか鬼とかいつた醜惡なものばかりであつた。尤も廣い世の中には、蛇を美の標本として、飼育する人もあるなど聞ては居るが、これは普通人の考へ方、常人の見方ではあるまい。誰でも、透迂として義理を遣ひまはる長蟲の姿を見ては、先づ消魂の思ひをするのが常であらう。

かういふ風に考へてくると、これらの患者に見る幻視などいふものは、平常自分の嫌惡するもの、醜惡視するものが、その眼底に反映するものとか思はれぬ。心理學者の説明を聞きたい。

精神病者には、幻視の外に、幻聽といふものがある。何も話をして居ないのに、人が話をするやうに聞えるのである。

私の病院に居た或女患者で、月經時が近づくと、必ず幻聽を伴ふがあつた。そして、自



分の耳を掩ふて、疊にうつ伏しになるのであつた。何とかして、それを聞くまいと苦悶するのである。そして病勢は悪化する。

コルレッチの小品に、或殺人犯人が、ひどく幻視と幻聴とに悩まされるのを書いたのがあつた。

それを書いて見よう。

×

×

×

一外人が、ルーベツクの或商人の家にやつて来た。その外人は、商人の知人からの紹介状を持って居た。

外人は、いとも懇切丁寧な待遇を受けた。外人の案内された離れ屋は、綺麗に片付いて居て調度類も数少なく、別にこれと言つて、心にとまる何物もなかつたが、不圖彼が壁に懸けてある奇怪極まる畫を見た瞬間に、寒さが脊筋を走つて、心臓の鼓動がビタリと止まるのを感じた。

その畫は、唯一つの顔を描いたものであつた。が併し何といふ陰惨な顔貌であらう。描寫の態度も、相當に立派ではあるが、ジイツとこの畫を見詰めて居ると、如何しても抵抗する事のできない不思議な誘惑を感じるのであつた。彼は此畫を見まいと努めた。が如何した因果か、矢張り見ずには居られない。そこには、何物か言ふに言はれぬ微妙な誘惑があつたのである。彼はベツトに入つてからも、其畫が、自分を見詰めて居る様な氣がしてならなかつた。冷汗三斗、膚に粟を立てて、まんじりともせず、不安の一夜を明かした。

翌日の彼は、顔面が蒼白になつて、表情が鈍磨した。言はゞ、癡呆者の状態であつた。そこへ、主人がやつて来た。

「お見受けする處、お顔の色も冴えない様ですが、如何かなさいましたか。昨夜はおやすみになれましたか。」と尋ねるのであつた。



「イヤ如何も壁畫を見てから、ヒドイ恐怖觀念にとつつかれましたね。おそろしいの何んのつて、身の毛もよだつばかりでした。昨夜は一晚中、まんじりともしませんでした。」と彼は答へた。

主人はシマツタといった表情で、頭を掻いた。

「イヤ如何も済まない事をしました。一體この室を使ひます時は、何時でも、この畫をはづして他に持つて行く事にしてゐるんですが、昨夜と云ふ昨夜は、全く失念してしまひました。飛んだ御迷惑をお掛けして、今更お詫の致しやうもありません。」と氣の毒さうに、頭を下げるのであつた。主人は重ねて、

「この畫は、全く人をこはがらせます。この畫を見て、イヤナ氣持にならぬ人は、廣い世界を金の草鞋でさがしても、無いかも知れません。この畫は、不圖した因縁で、私がつて居ます。如何にも怖い畫ですが、描法が立派なので、手離す氣にもなれず、又引裂いてしまはふといふ心も起りません。この畫は、何處かに人をひきつける底力、魅力を持つて居るんです

ね。」

と言ふのであつた。彼は、

「見ても怖ろしいこんな畫を、あなたは如何して、お手にお入れになつたのですか。」と訊いた。主人の答は次に示す通りであつた。

私の親父は、ハンブルグで商業をやつて居た。或る日、父が、とある喫茶店で、一杯の珈琲をすゝつて居ると、そこへ一人の青年が入つて來た。見るからに、キョトくと、落付かない男であつた。青年は室の隅に陣取つた。様子を見ると、何か聞えでもするかのように、頭をヒョイ／＼と、後に振向ける。そして、眞蒼な顔になつて、もがくやうに身を顛はせるのであつた。かういふ事を、何度となく繰返した。父は此青年を、二三日も續けて、同じ喫茶店に見た。そして、此青年のかうした態度は、父の好奇心をそゝるに十分であつた。父はあつた時、青年に向つて、思ひ切つて、



「よくお目にかゝりますね。」

と話の口火を切つた。

青年は、父が何となく、温い同情心に富んでゐるのを見て取つたものか、後では向ふから進んで、身の上話をしかける様な間柄になつた。この青年は、伊太利生れの畫家であつた。元より生活の餘裕とても無かつたが、如何にか斯うにか、自分の描いた畫を賣つて、其日々々を過して行くだけの事は出来た。

畫家は、或若い貴族の保護を受けて居た。然るに、不圖した事から、彼等兩人は争ひを始めた。我まゝ氣まゝな貴族は、怒つて畫家を罵詈譎するのみか、果ては打ち打擲さへするのであつた。畫家は憤懣に堪へなかつたが、何分にも、これまで受けた恩義もあり、それに元々、門地も違ふわけなので、先づ腹の蟲を殺して、辛抱するの外はなかつた。

畫家の苦患の日は、これより始まつた。何と考へ直しても、貴族の仕打が、胸に納まらな。何とか、復讐の方法はないものか、こんな事を考へる日が、幾日となく續いた。そして

悶へに悶へた擧句、畫家の決心はついた。畫家は、貴族を暗殺してしまつたのである。言ふ迄もなく、畫家は生れ故郷に長い草鞋を穿いて、ハンブルグにやつて來た。

貴族を殺してから、幾日も経たない或日の事、畫家は、人の群れ集ふ或町で、自分を呼ぶものがあるのに氣が付いた。何だか聞いた事のある様な聲音であつた。畫家は、思はず後を振り向いた。すると、そこには、貴族の顔があらはれて、うらめしさうに、ドイツと、畫家の顔を見詰めて居るのであつた。

此の事があつてから、畫家の心の平和は、全く破れた。どんな時でも、何處へ行つても、どんな仲間の中に居ても、畫家を呼びかける貴族の聲が絶えなかつた。畫家が思はず振りかへすと、そこには、畫家を見詰める貴族の苦がい顔があつた。こんな工合で、畫家はやけのやん八になつた。スツカリ氣を腐らせた。木枯らしの吹く冬野の様な、荒んだ心になつてしまつた。畫家を見詰める貴族の顔と、自分の顔、畫家をねめつける貴族の眼と、自分の眼、見詰め合ひ、睨み合ひの姿となつて、描いて見たのが、とりも直さず、グロテスクそのもの



といふべき此畫であつた。が併し、畫家は、結局心の苛責を、如何する事も出来なかつた。そして、とても、こんな苦しい、切ない、イラ／＼した生活に堪へ切れない事を自覺した。何とかして、旅費が出来たなら、ローマにかへつて、斷頭臺上の露と消え、罪の償ひをしよう、決心したと父に語つて、さめざめと泣くのであつた。

畫家は、その時、奇怪極まる此類の畫を父に送つた。

それは、やるせない、寄る邊のない異郷の空に、まことに、數奇な運命に泣く青年畫家に對して、何くれとなく、親切を盡くした父の厚意に報いたのであつた。

### 森國手のこと

醫學士森繁吉君は、私の病院にとりて、忘れる事の出来ない恩人である。

君が院長になられたのは、明治三十八年十二月であつた。そして、大正四年五月に退職せら

れた。君の後を襲いだのが、今は世に亡き橋健行君であつた。

森君の院長時代には、私はまだ病院の經營には關係してゐなかつた。其頃私は、警視廳の役人であつた。

君は亡父の片腕であつた。單に院長としてのみならず、經營上の事についても、亡父の相談相手であつた。同郷人たる君が、院長の職にあつたればこそ、亡父は安んじて、經營に没頭する事が出来たのであつた。亡父は經營上に關する總てを君に打明けた。

君は温厚穆々の質である。君には詭術も虚妄もない。其人、たとへば熒然たる輝石である。私は今でも君と相往來して居るが、未だ會で、君の失言遺色を見た事がない。杏林界の君子と言ふべきであらう。

君には患者はよくなつた。大正十二年九月の大震災の直後、君は一時、私の病院の醫員となられた事がある。君の院長時代から残つてゐる患者が澤山あつて、君を捉へて、森先生だ森先生だといつて、なつかしさうに思はぬ再會を歡んだ。



君は今、京橋は築地橋の邊りに、開業醫として門戸を張つて居られる。あの邊には、君でなければ夜も日も明けない患家が澤山ある筈だ。

### 橋健行博士のこと

橋君は實に感じのいい人であつた。イクラ廣い世間でも先づあの位感じのいい人は、そんなにザラにあるものではない。

橋君は寛厚の質であつた。そして洒脱で垢のぬけた人であつた。斷じて田舎者では無かつた。橋君に接した何人でも、兎の毛ほどの悪感情を持たなかつた。先輩然り、友人然り、同僚然り、君の部下亦然りである。それ程君は調子のいい、程のいい如才のない圓轉滑脱の好紳士であつた。

大正四年五月、私の病院では或る事情の下に、陣營の建て直しをしなければならぬ事になつ

た。私は友人たる東京府巢鴨病院醫員黒澤良臣博士—今熊本醫科大學教授—に院長たらん事を求めた。博士は一應之を承諾せられたが、仔細あつて、博士は自分の代りとして橋君を推舉せられたのであつた。

橋君ならば實にいい、あの人が院長になれば、病院は必ず將來發展する。君を知つて居る誰もがかう評した。

世間の豫想を裏切らずに、院長としての君は大に受けた。先づ何より嬉しい事には、患者全體がなつた事である。従業員は擧げて、君の斐々たる襟度に服した。音に患者や従業員が完全に君の前にひさまづいた計りでなく、患家の人達も悉く君に推許した。何れも口を揃へてあの先生ならばいいといふ。

病院の雰圍氣は橋君萬能で、君でなければ夜も日も明けないやうになつてしまつた。

私の岳父杉中利平次は、膀胱癌を以て大學病院に入院した。土肥慶藏、中野等、橋本喬博士等の診療を受けて居ながら、どうしても之等の人達に頼り切れないのであつた。是非橋君に診



て貰ひたいと言ふ。一層俺は退院して橋君に診て貰はうかとさへ言ひ出すのであつた。橋君は精神病醫である。膀胱癌の主治醫にはなれない。併しあなたがそれ程までに言はれるなら、相談役に時々橋君に来て貰ひませうといふ事になつて、私から其旨を君に通じた。爾來君は時々岳父の枕邊に其温顔を現はして呉れた。すると岳父は不思議にも落付が出来て、安靜の氣分を漂はすのであつた。

橋君には人をチャームする不思議な魅力があつた。君の人徳とでもいふべきであらう。どんなに大家でも、人間の身體を唯物的に取り扱ふやうな人ではダメだ。人間を取り扱ふには、人間を取り扱ふだけの心掛が必要である。そこに魂と魂との觸れ合ふ何物かゞなければならぬ。

橋君の人に好かれるのは、蓋し其天性と、修養と相俟つて、自ら渾成の域に入つたのであらう。

橋君が學位を取る便宜上、もう一度松澤にかへり一勉強して來たいとの腹を私に打ち明けら

れたのは、大正十年三月の事であつた。亡父も私も落膽した。それはちやうど、今迄春光悠々たる春の野邊を歩いてゐた私達が、突然千仞の谷に墜落したやうな感じであつた。後任には何れは相當の人を推舉して呉れる事は勿論であらうが、何としても君との別れがづらい。

橋君は松澤に轉じ醫長となり、此處で學位を取り、後千葉醫科大學助教授となり、更に教授に進み、又附屬病院長に至つた。

君は酒を呑むと口癖のやうに、

「俺の最後の隠家は戸山病院だ。何時またあそこに行くやうになるかも知れぬ。」

と言つたといふ。だから、君が私の病院に後任を推舉した時にも、其人は君の胸中に氣兼ねをして、長く其職に居ていゝのか悪いのかを考へさせられたとの事である。私も後では、病院の箇人經營をやめて、君との完全なる共同事業にしたいものだと思つてゐた。謂はゞ君と私との間には不言不語の裡に、かうした默契が成立してゐた譯である。併し時の潮は代つて君は醫科大學の教授となり、私もまた或事情の下に急轉直下、終世の事業と思つてゐた病院を、東京醫學



専門學校に讓渡するの段取りとなつた。果然君と私の默契は、永遠の默契に了つた。

昭和三年の春、私は君を千葉市本町の家に訪ねた。然るに折悪しく旅行不在だとあつて、令闈と半日の閑談を試みて歸京した。其後私は風塵追々の間に奔走して、君に逢ふて舊を語り新を叙するの機會を得なかつた。

去年の四月十八日、君は逝いた。享年五十三。病は急性肺炎であつたといふ。あの健康そのもの、如き偉軀を持つた君、萬人親しみの中心となつて、春風の感じを人に與へた君も、今ははや猪鼻臺の煙りと化したのかと思ふと、そゞろに人生の無情を歎息せざるを得ない。

君は加賀金澤の人、開成中學より第一高等學校を経て、東京帝國大學醫科大學に進み、後千葉醫科大學の教授たるに及び、官命を以て歐洲に留學した。酒を嗜み、盆栽を愛し、旅行を好み、折花攀柳の風流を解した。嚴君健三翁は、曾て開成中學校長であつた。末亡人金田氏、名は英子、子無し。

### 挽歌

下總の猪鼻臺に君がむくろ煙りとならむ今日しかなしも

うつそみのすぐれしむくろもてりきをうづきのなかばいのちはてにき

### 入院料夜話

どこの家でも、一度び精神病者が發生したら、その平和は立ろに破れてしまふ。諺に狂人に双物と言ふ。場面に依ては、生命に危害を加へられるおそれが無いとも言へぬ。従つて家人は枕を高くして寝る事も出来ぬ。そこで精神病者の發生した家では、入院料の算段は二の次ぎとして、先づ精神病院に入れてしまふ。

そして、中産階級、乃至はそれ以下の家庭に精神病者が發生すると、その家では經濟的に苦しみ抜いた末は、破綻といふカタストロフィに陥る事もある。それは言ふ迄もなく、精神病は他の病氣に比して、入院期間が非常に長いといふ事が主因になるのである。一年や二年はおろ



かな事、五年六年乃至は十年、場合に依ては、一生涯を病院に送らねばならぬ悲惨な運命の下に置かれた患者もある。現に松澤病院の蘆原將軍の如きは、病院生活、實に半世紀以上の長きに及んで居るではないか。

私は次に、かうした事に關する二三の話を語らう。

或大會社で重役に近い階級に居る人の娘が、十三の時に氣が變になつて、精神病院に入院した。最初は小兒ヒステリーとの診断で、直ぐ直るだらうとの事であつたが、事實はさうは行かなかつた。その後、私の病院をはじめ、三四の病院を轉々し、病院生活二十三年、米の生る木をわしや知らぬといふ岡山育ちではないが、まだいはけなき十三の小娘から、今日までの長い病院生活で、世の中の事は何も知らずに、人の世の青春を陰惨な精神病院の病棟に横へた。

此家では、此娘の爲めに、二萬圓の金を別途に積み立てて、その利子を以て入院料に當てて居ると聞いた。患者自身は、元より數奇憐れむべき宿命であるが、一面その家庭にとりても、

生やさしい苦勞ではない。

或大會社の社員であつたが、その長男が精神病にかゝつた。そして私の病院に入院七年の月日を経過したが、さて何時直るものか更に前途の見通しがつかぬ。月給百圓程度のサラリーマンで、如何にもかうにもアガキが取れなくなつた。まことに、無理のない話である。

私は此人に泣き付かれて、待遇は元々通りにして、入院料だけを公費並に割引した。此人は泣いて感謝の意を表した。

勅任官といふ高級官吏の倅が氣が狂つた。此人は役人としては高い地位には居たが、負債は山積、子供は多く、とても其倅を精神病院に入院させるの實力は無かつた。

私はその人の關係筋から、公費患者にはなれないものかとの相談を持ち掛けられた。如何いふ内情があらうとも、白毛の帽子をかぶつて、燦爛たる大禮服を身に纏つて居る階級の人の息子では、その筋でも、公費患者の手續は取つてくれないのが常識ではなからうかと返答した。

勅任官はヒドク落膽したさうである。



X X X

私の病院では、自費患者の入院料未納額は、毎月平均三千圓はあつた。廣い世の中には、入院料の滞納などがあるのかと、不審を起す人があるかも知れぬ。

それには仔細がある。

前にも述べたやうに、精神病者は入院期間が長いので、最初は入院料を支拂ふ力であつた人も、後には經濟上の變化で、その支拂が困難になる場合がある。

入院料の滞納は是に於てか起る。

四國の或農家で、倅の入院の爲めに、毎年田地畑を賣拂つて、これを支辨して行くのがあつた。

この事情を打ちあけられた私は、そぞろに惻隱の情を起して、入院料を公費患者なみに割引した。

爾來その人は、毎年々々、一年分の入院料だとなつて、三百圓の金を一時に送つて來た。それには何時でも、

「此金をお送りします爲めに、また田地を賣りました。」と涙の文字で認めてあつた。

私の病院に、或時、山嵐のやうに荒れ狂ふ一人の女患者が入院した。二人の會社員風の男が付添つて來た。この二人は保證人と爲つて、入院委託書に署名捺印し、二週間分の入院料を前納して歸つた。

二週間は経過した。保證人の一人も病院にやつて來ない。やがて一ヶ月は経過した。保證人は依然として姿を見せぬ。

病院では、事務員を二人の保證人の住所に派した。併しそこには、さうした人たちを發見する事が出来なかつた。果然、私の病院は、みすゞかる信濃の國にありと聞く姨の姥すて山にされたのであつた。



かうした譯で、自費患者の入院料の未拂は、毎月平均三千圓の高に上つた。或時事務員の一  
人が、

「これではとてもヤリ切れません。私が一つ入院料を取立て、來ませう。」  
と言つて、新潟、山形、秋田、宮城の四縣下に出張した事がある。

併しその結果は、僅かに事務員の旅費を支辨しただけの、クタビレ儲けに過ぎなかつた。  
私の病院では、商賣が下手であつたのか、何時でも入院料の停滯といふ暗礁が、目の前に横  
はつて居た。

昔の商賣往來には書いてない悩みであつた。

## 乙 鱸ヶ濱の美石

大正三年の夏に、私の病院では、一大難局に直面した。それは、一看護人が或患者を殴打し

た事と、一醫師が或患者の外傷の手當の方法を誤つた事の二つが、鉢合せをしたやうに、一所  
になつて起つたのである。

狂人の手記（前項参照）に端を發した此事件は、監督官廳の眼から見て、やかましい問題  
になつた。

西洋の小説に、ローリング・ストーンといふのがある。ある懸崖の一角が、物のハズミで崩れ  
出すと、ガラ／＼と大石小石が顛落して、最後には、目の中にも入らないやうな道のべの小石  
までが、そのあふりを食つて、轉げ出すといふのであつた。

私の病院で起つた、看護人と醫師との失態、續いて狂人の手記が投じた一石、それに依て事  
態が容易ならぬ事に悪化した迂餘曲折は、ちやうど、かういふ調子であつた。

亡父は此に至つて、傷心の結果病を醸した。依つて暫らく武州金澤の小庵に、靜にその病を  
養つた。そして後始末の一切は、私が引受けてその衝に當つた。

私は屢金澤の小庵に亡父を尋ねて、一宵の清話に、傷心の事を忘れるやうにと仕向けた。



私の家には、桐の五重の箱に納めた美石數百顆がある、今は世に亡き上院議員の蕙石山口弘達子爵が、墨痕鮮かに、乙艦ヶ濱の美石と題簽された。

私は此美石に、限りもなき愛着を覚える。

此石こそは、傷心のあまりに、老いて四大の不調を來した亡父が、暫らくは行雲流水を學んで、無心の童心に返り、朝に夕に、夏島の見ゆる乙艦ヶ濱の渚に下りて立ち、自ら丹念に拾ひ集めたものに外ならぬ。

私は此美石を摩撫する毎に、惘然として感慨之を久うする。夾竹桃が炎の燃えるやうに咲き亂れた彼の小庵をおもふ。小波の打寄する乙艦ヶ濱をおもふ。一髪青螺の如き夏島をおもふ。その夏島の上空に、ちぎつた綿のやうに、ふんわりと揺曳せる白雲をおもふ。そしてその磯濱に下り立つた亡父のさびしい後姿をおもふ。

私にとりては、此美石の一つくが、亡父の魂を呼び返してくれるやうな氣がしてならぬ。亡父の心の姿をしのべとばかりに、さゝやくやうな氣がしてならぬ。

此事に關して、假にも筆を逸してならないのは、父執坪谷水哉翁が、その當時禍を轉じて福と爲すが爲めに、亡父に與へられたる心からなる助力である。その淵嶽の厚恩は、私の夢寐忘れんとして忘るゝ能はざるところである。私は今更ながら、その記憶を新にして、翁に感謝の誠意を捧げたいと思ふ。

金澤や乙艦ヶ濱の板びさし夾竹桃は咲きみだれにし

まぐはしき石をとらすと渚べに下り立たしけむ父が目に見ゆ

### 看護人の要求、罷業、爭議

精神病院の看護人(男子)が結束して、或一定の事項を病院に要求する。そしてその要求を容れられないと、その目的を貫徹するの手段として、罷業に移る事がある。これは精神病院にとりて、何よりも痛手だ。



大正十三年三月に、東京府立松澤病院で、看護人が結束して、病院に十一箇條にわたる要求

書を提出した。これは従業員懇親會の席上で、一部の看護人が、院長吳博士に對し、日給手

當の増額を要求したのを、院長がスゲなくハネ付けたのに端を發したのであつた。

そして、その形勢が段々險惡になつたので、所轄、世田谷警察署、及警視廳から、多數の

私服刑事を出して警戒した。(東京朝日新聞に據る)

昭和八年四月に、根岸病院の看護人、看護婦、賄員等百五名が、職員待遇上の件につき、

二十一ヶ條の要求を、院長松村清吾に提出して争議團を組織した。(東京朝日新聞に據る)

昭和十一年七月に、保養院では、看護人八名の鹹首に端を發し、看護人が争議團を組織し、

日本橋同盟北豊島聯合會員が之れに聲援を與へ、不當解雇組合切崩し反對の決議文を、病院の

理事者に手交し、従業員七十餘名は、従業員大會を開かうとしたが、警官に拒絶されたので、

メーデー歌を高唱しつゝ、ワツシヨ〜と街頭に流れ出した。そこで所轄巢鴨警察署は、従業員

七十餘名を檢束した。(報知新聞に據る)

およそ、精神病院として、これ位困る事はないのである。

かうした騒ぎのために、病院に不測の事故が發生したら如何するか。兇惡な患者、たとへば人を見たら殺意を生ずるといつたやうな患者が、監視のゆるんだのを千載一遇の好機至れりとはかりに病院を逃走したら如何するか。縊死患者を出したら如何するか。患者同志の格闘を生じて、相手方を死に致らしめたら如何するか。放火癖の患者が、此時とばかりに、病室に火を放つたら如何するか。

かういふ風に、必然的に豫見し得るあらゆる場合を想像して見ると、看護人の罷業は病院経営者にとりて、鬼門中の鬼門と言はねばならぬ。

この問題は、経営者が看護人の要求を入れてしまへば何事もない。それで一切は解決する。

天下は太平である。併し一方経営者の立場になつてみると、實際上唯々諾々として看護人の要求を入れかねる場合もある。

私の長い経験によると、看護人の争議などといふものは、昔は薬にたくも見當らなかつ



た。そろ／＼さういふ氣分を醸成して來たのは大正も十年後の事である。そして、經營者に對する大なる脅威と爲つた。

どこの病院でもさうであらうが、私の病院でも、患者の取扱と院内の規律と、この二つには深甚なる注意を拂つた。その結果、如何も患者の取扱が手荒いとか、患者を殴打したとか、院の備品を盗んで遊蕩の財源にしたとかいふやうの手合は、その職を免ずる事になつて居た。經營者としては、それが當然の事である。

然るに此世の中といふものは、實に不思議なもので、この當然の事が問題になる。病院の騒動は常に端をこゝに發する。

私の病院で、或時四五人の不良看護人を、一所に解職した事がある。すると此等の看護人は、直ちに一室を占有して籠城政策を取り、旬目の長きに及んだ。何と言つても退去せぬ。一圖に復職を要求し、若し復職を承認せぬならば、かく／＼の金を出せと不當な退職金を要求した。

そのうちに、追々外部との聯絡が出來、江東方面の労働團體が背景になつて、段々騒ぎが大きくなつて來た。誰れの仕業か、杉村幹はあはれな精神病者を食ひ物にして、巨萬の富を成して居る。宜しく人道の爲めに、彼を膺懲すべしといふビラを、街頭に撒布するに至つた。併し私は、ドンナに騒ぎが大きくなつても、彼等の要求を容れなかつた。

それには二つの仔細があつた。

その第一は、若し私が彼等の恫喝の前に膝を屈するならば、病院の經營者として、將來多くの従業員の束ねを付けて行く事が出來ないと確信したからである。

第二は、若し私が彼等の要求に頭を下げるならば、將來不良看護人があつても、此れを解職する事も出來ず、彼等の爲す不良行爲を、手を束ねて傍觀する事になり、やゝもすれば、世人が疑惑の念を持つてゐるやうに、病院を真正正銘の伏魔殿と化してしまふやうになると確信したからである。

私は警視廳から、散々に叱られた。苟くも東京府の代用病院として、こんな騒ぎを起すやう



では、警視廳としても、安心して公費患者を委託する譯には行かぬ。病院の監督者としての責任を如何するかといふのであつた。経営者として私は、上からと下からの板ばさみに爲つて苦しんだ。そしてつくづく此商賣がいやになつた。

聞くところによれば、今回の保養院争議は警視廳の調停に依つて、圓滿に解決したと云ふ。警視廳が、その真相を仔細に研究して兩者の間に處して機宜の調停の勞をとられたのは、正しく助長行政として、病院監督上の一大進歩であると思ふ。是れ又時勢の推移である。

## 精神病院と看護人

精神病院をうまく經營するには、如何したらいいか。

私に向つて、若しかうした問ひを發する人があるならば、私は端的に、それは看護人（看護婦にあらず、男子なり）の良否如何に依て決定する問題だと答へる。換言すれば、看護人に素

質のイ、のがあれば、病院は立派な成績を擧げる事が出来、看護人が不良揃ひであれば、これと反對の結果に了はる。私は精神病院の成功不成功は、かゝつて此一點にあると思ふ。これさへうまく行けば十分である。外には、大して六かしい事はない。従て精神病院に於ては、看護人の修養訓練といふ事が、一番肝腎な仕事になる。

一體精神病患者を看護すると云ふ事は、並大抵の仕事ではない。その病状も十人十色、その氣風性格も、また十人十色、何れも町々である。色情狂があり、放火狂があり、妄想狂があり、興奮する者もあれば、憂鬱状態の者もある。

殊に變質性患者の執拗、片意地、痲痺性癡呆の大小便の垂れ流し、かう數へ立ててくると看護人の辛勞も、並大抵のものではない。多くの患者の中には、獐猛にして野獸性を帯び、殆ど手の付けようのない者さへある。若しこれを看護する者が職員でなく、肉親の間であつたらば、自然ゲンコツの一つ位は、振り上げたい氣分にもなるであらう。併し假にも看護人といふ肩書を有する彼等にとりては、さうした事は絶対に許されぬ。どんな場合でも、患者をなぐ



るとか打つとかいふ事は絶対に許されぬ。否患者の爲めに踊らせられてはならないばかりの話ではなく、私の病院などでは、曾て患者の爲めに、鐵瓶で頭を割られた看護人さへあつた。

かうした譯だから、およそ精神病院の看護人たらん程のものは、神の心にならねばならぬ。佛の心にもならねばならぬ。愛は己の利を求めず（哥林多前書十三章）人若し汝の右の頬を打たば左の頬をも之れに向けよとの心にもならねばならぬ。シユライエルマツヘルが言つたやうに、愛の心と人間味とがなければならぬ。宗教の法悦、宗教の泉をこゝに求めねばならぬ。孔子の所謂、身を殺して仁を爲すといつた心境にもならねばならぬ。

他の言葉で言へば、聖者の心になれよといふ事である。併し獨り看護人に限らず、世の中の何人に對しても、さうした事を求めるのは、金の草鞋でグーテンベルヒの聖書をさがすよりも至難の事である。唯その平生の心がけのうちさうした氣分の萬分の一でも持つて貰ひたいと思ふ。

以上述べた通り、看護人が神の心になり、佛の心になつてくれれば、病院は立派な成績をお

げる事になる。が併し、それは言ふ可くして、容易に行はれない事である。五官の持主たる彼等は、やゝもすれば感情に驅られて、看護人といふ職責の埒外に出でぬとも限らぬ。患者を打つとか、躡るとかいふ事は別にしても、若し看護人とその氣分があるならば、患者の所持品をクスネル事も出来るであらう。患者の食物の上前をハネル事も出来るであらう。

病院の幹部が、病室を視察する場合には、何時でも秩序整然、規律厳正、一點の非の打ち處も見付からぬ。併し幹部は朝から晩まで、看護人の尻に付いて、その行動を監視する譯にも行かぬ。神ならぬ佛ならぬ彼等に、斷じて不都合の行爲がないと、私でなくとも、誰れが言ひ切る事が出来るよう。

私は何を根據として、さうした事を言ふか。

それは、事實上、看護人の行爲が元で、公けの問題となり、監督官廳から、經營者としての責任を問はれた事の一度や二度ではない私の経験が、斯く言はせるのである。

それなら、如何して看護人の不都合な行爲を、經營者たる私が知らずに居て、監督官廳か



ら叱責を受くるに至つたのか。それには仔細がある。

一例を擧げて言ふと、看護人が、私に對して或要求をする。私がそれを容れ、ば何でもない。併し時の事情で、その要求を容れ兼ねる場合もある。利害の對立が尖鋭化して、私に反感を持つに至つた看護人は、報復手段として、監督官廳に投書をする。病院の内部には、かくの事がある。かうした不都合な事がある。取締上、このまゝに放任されるのかといつた調子で投書をするのであつた。彼等の所謂不都合な行爲といふのは、投書者自身の行爲であつたりする場合さへあつた。元より讀む經があつての投書である。記事の針小棒大は申すまでもない。兎に角、この結果は、何時でも監督官廳から叱責を受くる事になつたのであつた。欺くに道を以てすれば、君子と雖も免れず。所謂燈臺下暗しで、これを如何する事も出来なかつた。

下世話に云ふ。新しい疊でも、ハタケば塵が出るといふ。況んや三百五十人の狂人と、一百人近い従業員とを有する私の病院に於てをやだ。絶対に手落ちのないやうにしたいのは山々

だ。が、中々さうは問屋がおろさなかつた。これは、單に私の病院ばかりなで、おそらくは何處の精神病院でも、その揆を一にするのではなからうか。

會て或精神病院で、こんな話があつたと聞く。

それはABCの三人が、計画的に、金儲けをたくらんで、その病院の看護人になつたのであつた。

最初にAが、その病院の看護人に採用された。一ヶ月後にBが、同じくその病院の看護人を志願して、これまた首尾克く採用された。Cが最後に同病院に採用されたのは、更に二ヶ月を経過しての事であつた。

さて三人は最初の目論見通りに、この病院の懐に飛び込んだ。三人の闇中の活躍はこれからである。

三人の患者に對する取扱は、親切丁寧を極めた。全く堂に入つた待遇は、兎の毛ほどの落度もなかつた。獨り患者に對してばかりではなく、同僚に對しても、上司に對しても、禮讓至



れり盡せりて、完全に模範看護人と銘を打たれるに至つた。

三人が模範看護人の折紙を付けられてから、更に半歳の月日が流れたある日の事。

此三人は院長の前にあらはれた。見れば三人は、銘々に一冊の帳簿を手にして居るではないか。

温良なる模範看護人は、こゝに其頰冠りをぬぎすてて、悪辣残忍の恫喝漢と爲つたのである。否々、當初の目論見たる金儲けのための地金をあらはして、羊は狼と化したのである。

三人は院長に向つて、何時の何日には、斯くくの都合あり、何時の何日には、かうした不始末ありと、その手にせる帳面をツキツケて、さて改めて開き直つた。

これは人道上の問題だから、斷じて不問に付する譯には行かぬ。われら三人は、正義の爲めに、憐れむ可き精神病者の味方となつて、これを救済せねばならぬ。従て戈を倒にして、此病院を敵として戦はねばならぬ。これを社會に發表して輿論に訴へたいと思ふ。

とのスゴ臺詞を並べた。何ぞ圖らむ此三人は居常笑の中に刀を礪いで居たのであつた。

是に至つて、精神病院経営者の苦難も、中々容易のものでないと思ふ。

看護人の投書では、私も幾多の苦い経験を持つ。今その一つ二つを書いて見よう。

或時、所轄早稲田警察署の平野署長が、私に向つて、

「一つ厄介な事が出来ましたよ。如何も看護人がツマラヌ事を國民新聞に投書したらしいんです。またウルサクなりますから今の中に、何とか採み消しにするうまい方法はありますか  
なあ。」

と嘆息して言ふのであつた。

果然禍は蕭牆の中にとつたのである。

私はその足で、自動車を日吉町の國民新聞社に驅つた。社は震災後のバラックであつた。刺を徳富蘇峰先生に通ずると、受付子は、

「何時もなら、もう御出社になる時分ですが、今日は如何したのか、まだお出でになりませんか。」



と言ふ。私は更に自動車を、大森玄藏ヶ原の先生の自宅に飛ばせた。已むぬるかな。

「タツタ今御出社になりました。」

と玄關子は言ふ。まゝよ、かうなれば仕方がない。今日の一日を、先生の後をつけまはすだけの事だ。斯くて、もう一度車を日吉町に返して、ヤツト先生に面會する事が出来た。

先生は輪轉機の囂々たる中で、靜かに英書を繕いて居られた。私は先生に來意を告げて、つぶさに陳情する處があつた。

私の陳情に耳を傾けられた先生は、快く、

「何とかしてあげませう。」

と言はれて、社會部長の山根某を其席に呼ばれ、

「杉村君は、志賀重昂君の紹介で知つてる間だが、病院の事で何か投書が来て居るさうだが、若しそんなものがあつたら、出すのをよして呉れたまへ。」と言ひ切られた。山根氏は鞠躬如として、

「ハイかしこまりました。」

と答へて、自席に歸つた。

私は感激した。ありがたさに、胸のこみ上げてくるのを如何する事も出来なかつた。こゝに雲霧は披けて、天日は見えた。私の心は軽くなつた。

思へば私がまだ中學の一年生の時、——明治二十九年——讀で最も感興を起したのは、先生の静思餘録と松村介石の立志の礎と、志賀重昂の日本風景論の三つであつた。それ以來、私は無上に先生が好きになつた。仙臺の高等學校に居た時、辯論部の擬國會があつて、その記事を私が書いた事がある。その時も、學堂何處にある。木堂何處にある。抑も我が愛する長谷場純孝何處にあるといった所謂蘇峰調を真似て自ら得意になつたものだ。それほど私は先生の心酔者である。然るに此事があつて以來、感情の上から益先生に傾倒した。

時は十月末の小春日和、牛込の若松町から、京橋の日吉町へ、それから大森の玄藏ヶ原へ、それから又日吉町へと自動車を走らせたあのあわただしい晩秋の一日、大森の玄藏ヶ原では、



道のべの薄も、やゝにほゞけて、楓の木の上では、鵲が眞澄の空に向つて、鋭い聲を放つて居た。

私は又或時、看護人が都新聞に投書したらしいとの事を耳にした。幸なるかな。都新聞の政治部長服部三君は、私とその郷關を同うし、小學校では机を並べた竹馬の友である。私は直ちに服部君を社に訪ねて、ツマラヌ事を新聞に出さないやうにしてくれと頼んだ。君は社會部に交渉して、その投書を没書にして呉れた。

持つ可きものは友なるかな。私は心中に服部君の厚意を牢記した。

これを要するに、精神病院經營者に取りての最大難關は、看護人の訓練修養の四字に盡きる。およそ世の中のどんな事業でも、障碍の伴はないものはない。若し障碍のない仕事があるならば、それは全然意味のない仕事だといふ、マクドナルドの筆法に従へば、精神病院の如きも、看護人問題といふ最大難關があるので、始めて有意義の事業と言ひ得るのかも知れぬ。元より看護人の中には善良なる君子のあるのは言ふまでもない。併し相當不良性を帯びたる者の多い

のも亦争はれぬ事實である。併しそれは獨り私の經營した病院にのみ限つた事で、他の病院には全然適用の出来ない事であるかも知れぬ。

私は府立松澤病院に、看護人養成所を設けるのが一つの方法ではあるまいかと思ふ。こゝで精神病學、生理學、衛生學、看護法の一般を授け、別に有徳の士を聘して、犠牲、忍従、謙讓忠實の美風を涵養し、さてここを巢立つた人たちを、各精神病院の看護人として配置したらどんなものか。少なくとも、桂庵に依て採用する看護人に比して、その質の向上したものと云ふ事が出来るであらう。

嗚呼精神病院、病棟も堅牢であらねばならぬ。衛生保持も、消火設備も大事である。その他百般の施設、悉く完全を期せねばならぬ事は言ふまでもない。が併し、觀察の或角度から言ふと、何よりも大事なものは人である。看護人の養成である。私を以て之れを觀れば、精神病院經營のすべては、畢竟此一點に歸一すると言ひ度い。



## 精神病院とジャーナリズム

私は公費患者は国立病院への項に述べるやうに、世間の精神病院に對する認識は不足である。世人は宜しく精神病院を見直して、是れに關心を持つべきである。精神病院の事業は、直接に産業的の効果は無いが、一面には、社會の公共安寧を維持し、他の一面には、その障害を除く重大なる役割を擔當して居る譯だ。世人はそこを買つて、精神病院を見直すべきである。精神病院には殺人鬼も居る。放火魔も居る。此等の一人でも、若し病院生活をして居ないとしたならば、社會に對して、どれだけの不安と、どれだけの脅威を與へるか。世人は宜しく思ひをこゝに致して、病院を直視すべきである。

私は此機會に於て、此點に關し、特に新聞記者諸君に一言したい。從來新聞紙上にあらはれた精神病院攻撃の記事中には、隨分尾緒のついたものがあつた。針小棒大なものがあつた。

中には全然、事實無根の記事さへあつた。現に東京の一新聞は、私の病院の惡聲を放ち、事實無根の記事を掲載して、病院の信用を害し名譽を損じた。後日私がそれを詰問するを、相濟まぬ事をしたとあつて、私に一札の詫状を入れた位である。尤も一口に新聞と言つても、ピンからキリまである事は云ふまでも無いが、そこに共通する一點は、興味中心の四字に盡きる。精神病院といふ題目は、近代のジャーナリズムに取りて、好個の材料であるかの如く見えた。

物の觀方も十人十色である。中には楯の半面を觀るとか、廬山の一面を觀るとか云ふ事もあり、視野の角度に依つては、そこに多少の開きがあるかも知れぬ。併し誰が見ても、先づ一つものは、大體は、略同じ處に落付くべきものだと思ふ。

私の病院は、或新聞からは、伏魔殿と言はれ、或新聞からは、理想境だと言はれた。伏魔殿と理想境、あまりにその開きが大きすぎるではないか。

A新聞は、某病院を評して「氣狂ひ病院は、氣狂ひを收容する事を目的として、國家が特設を許可したものだ。然るに官憲に阿附迎合して、氣狂ひでない者を氣狂ひとして監禁して居る。



官憲の無理に氣狂ひに作り上げて押込む偽造狂人と、病院の營利の爲めに歡迎する偽造氣狂ひ病院は氣狂ひでないとしりつゝ、彼等の自由を奪ひ、糧道を絶ち、醫師が先立になつて、悪獸の如く獄卒の如くに、毎日之れを凌辱して居る云々」と言つた。

かうした無理解な筆鋒を向けられては、殆ど釋明の勇氣さへ出ないかも知れぬ。社會の木鐸を以て任ずる新聞記者は、宜しく精神病院の重大なる使命と、困難なる役割とに、一掬の同情を持つて貰ひたい。審々諤々の論を草するはよし。董狐の筆を振ふも大によし。唯事實そのものが藪睨みであつてはならぬ。正鵠を得たものでなければならぬ。是れ又新聞記者の責任であり使命であると思ふ。

精神病院が、新聞記者の疑惑を解くには、積極的に病院を解放するのが一番いい。それが唯一の道であり最善の方法である。元來この精神病院でも、新聞記者の參觀はあまりに喜ばぬものだ。それは前にも言つたやうに、新聞記者が、興味中心の筆を弄するが爲めに外ならぬ。經營者として見れば、無理もない事だ。現に吳秀三博士でさへ、私に向つて、

「蘆原將軍が一人松澤に居る爲めに、面白半分に新聞記者がやつて来て、イヤうるさい事だ。」とあの六づかしい顔に、八の字を寄せられた事がある。

併し私の考へる處では、病院側は、宜しく襟度を大にして、進んで病院を開放するのがイ、と思ふ。さうして新聞記者が、精神病院に對する疑惑を氷解するを切望してやまぬ。

病院開放の支障は、醫師の立場から觀て、外來の參觀人に依つて、患者に衝動を與へ、病勢を悪化せしむる場合を豫見する事が出来る。

唯此一事のみが、病院開放政策の除外例と言へるであらう。

## 公費患者は國立病院に

私の病院では、自費の患者と、公費の患者との二種類の患者を收容した。

公費患者は、古くは、明治三十三年三月十日、法律第三十八號、精神病患者監護法第六條に依



る市區町 村長 依托の患者、後には、大正八年三月、法律第二十五號、精神病院法に依て、警視廳から送院の患者を指すのである。

一體我國の精神病者は、どれだけの數字に達して居るのか。將た又此章に言ふ處の公費患者なるものは、どれだけの數を現はして居るのか。

日本全國と言はず、今東京府下（警視廳管下）だけの、各精神病院の入院患者數を、昭和九年警視廳統計書（第四十四回、昭和十年十一月二十二日發行）昭和十年警視廳統計書（第四十五回、昭和十一年十二月三月發行）に依て調べて見ると、左の通りになつて居る。尤も此數字は、前年から持越の患者數に、昭和九年及十年中の入院患者を加へた數だから、始終不動に、これだけの患者が在院して居るといふ意味ではなく、その中には、退院患者も死亡患者もあるといふ譯になる。

昭和九年

病院名

公費

自費

東京府松澤病院	九一六	三九三人
×根岸病院	三六九	四四七
×加命堂腦病院	一八三	一八九
×王子腦病院	一八九	一七八
×保養院	三三一	四〇七
×青山腦病院	二九三	一六〇
×井村病院	一七三	二二二
×井ノ頭病院	二八六	三二五
×烏山病院	二二四	一六〇
田端腦病院	二四	一七二
山田病院		八九
巢鴨腦病院	一二	一八六



×青山腦病院	三三二	一九二
×井村病院	一六二	二二〇
×井ノ頭病院	三八四	三八九
×烏山病院	二四一	一五一
田端腦病院	三二	一六三
山田腦病院		八四
巢鴨腦病院	二六	一九七
×小林病院	二三	一〇五
小金井養生院		三〇
慈雲堂病院	九四	一二四五
東京武藏野病院	二一	三六五
高尾保養院		三六

病院名	昭和十年	
	公費	自費
小林病院	九	七一
小金井養生院		四〇
慈雲堂病院	二六	八六七
東京武藏野病院	一九	四二二
計	三〇五四	四三〇八
東京府松澤病院	八六七人	四二三人
×根岸病院	三八六	四三五
×加命堂腦病院	二二八	一八七
×王子腦病院	二〇〇	一六一
×保養院	四一三	三五〇



計

三一九九

四七三二

以上のうち×印は、東京府代用精神病院である。

次に、以上の各精神病院入院患者の累年比較表は次のやうになつて居る。

大正十四年	四九二七人
大正十五年（昭和元年）	四九二一
昭和二年	五四六二
昭和三年	六〇二二
昭和四年	六一四三
昭和五年	六〇八四
昭和六年	六二二七
昭和七年	六五二二
昭和八年	七〇一九

昭和九年

七三六二

昭和十年

八一三一

此中には、公費自費の兩者を包含する事は申す迄もないが、何れにしても、年々其數の増加を來たしつゝある事は、以上の數字が明らかにこれを示して居る。

私は理想として公費患者は、國家自らが國立病院を經營して、之を收容すべきものだと思ふ。私はどうしてこんな事を言ふか。それはいふまでもなく、精神病院經營者として、永い間の體験から、此確信を持つに至つたのである。現在の代用精神病院の經營者が、昔お前の經營して居た病院から見れば、さうした結論になるかも知れぬが、我々の病院には斷然適用の限りにあらずとの抗議が出るかも知れぬ。

繰り返して言ふ。私が斯く言ふのは、元より自家の經驗に基く一家言に過ぎぬ。

公費患者を國立病院に收容すべしとの根據は何れにある乎。

第一は、私立精神病院に對する社會の通念から觀てである。



今の一般社会は、私立精神病院の意義、性質、内容に對して十分なる理解を持たぬ。一言すれば、認識不足である。従つて私立精神病院の内部には、何の秩序も立つて居ないやうに考へて居る人が澤山ある。或は患者を牛馬の如く酷使するとか、或は患者を虐待して、死に致らしめるとか、さうした人道に反する行爲を、人知れず行つて居る處だと思つて居る人も澤山ある。要言すれば、私立精神病院を目して、グロテスクな伏魔殿だ位に想像して居る人が、相當に多いのである。

私の如きも、患者をイヂメないやうに、看護人に注意して貰ひたいと、本氣になつて言はれた事も幾度もある。「君は實にうまい仕事をしてるよ。患者に水を飲ませて、金儲けをするんだからなあ。」と、途方もない放言を浴びせかけられて、明いた口のふさがらなかつた事も、一度や二度の事ではない。

世人は、私立精神病院に對しては、かうした考へを持つて居る。刑務所、感化院、瘋癲病院この三つは、社会文化の發達に伴ふ必然的の施設として、歐州人が之れに對して、正しき認識

を有するのに比すれば、正に雲泥の相違である。

若し國家が自ら病院を經營して、そこに公費患者を收容するならば、誤れる世人の通念は、一朝にして雲散霧消するに至るであらう。

第二は、公費患者に對する私立精神病院看護人の通念から觀てである。

他の病院ではイザ知らず、私の病院では、看護人の眼から見た公費患者は、何としても、自費患者より一枚下に置かれて居た。自費患者に對しては、長年の間に、その看護取扱の上にて、別に何等の手落もなかつた。然るに公費患者の場合に於ては、往々にして、不測の事故を發生する。逃走がそれである。縊死がそれである。その外にも、思ひも寄らぬ事故が突發する。

これは、公費患者が自費患者に比して、その數が多く、従つて看護人の眼が届かぬ處から來たのではあつたらうが、その根本に於て、自費患者を目して、病院に取りて大事なお客様だとするに反し、公費患者に對しては、大事なお客様でないとは言はないが、事實上、彼等の心境



が自費患者程に、重きを置き得なかつた事は議論のないところである。そんなら看護人の数をウント増せばいいではないかと、言ふ人があるかも知れぬ。併し公費患者一人に、一人の看護人を付けるとか、乃至二人三人の患者の爲めに、一人の看護人を付けるとかいふ事は、言ふべくして、行はれない事である。若しそんな事したら、病院の経済は、一日にして破綻に瀕するであらう。

何の故と問ふことなかれ。公費患者の入院料は、一日金九十五錢である。

だから、看護人が公費患者に對して有する誤れる通念を、正常の觀念に引戻す事は、中々一朝一夕には出来ない。

若し國家が、自ら病院を經營して、そこに公費患者を收容するならば、誤まれる看護人の通念は、一朝にして雲散霧消するに至るであらう。

第三は、私立精神病院は本來營利を目的とする點から觀てである。

元來私立精神病院は、營利を目的とするものなるが故に、そこに公費患者を收容する事は、

根本に於て矛盾があると思ふ。

公費患者は、廣い世界に、たよる處のない無産階級の人達である。自費を以て入院する事出来ない、物質的に恵まれない、あはれな境遇の人達ばかりである。衣類や寢具はいふ迄もなく、帶、手拭、猿又、さては鼻紙の日常品から、理髮の費用に至る迄、悉く病院の負擔である。そして公費患者一日の入院料は、諸色の高いその頃でも、一日九十五錢に過ぎなかつた。九十五錢で、患者一切の事を引受けるのである。

私の亡父などは、自費患者とコミだから、經濟はとれるやうなもの、若し公費患者だけだつたら、到底十露盤は持ち切れないと滾して居た。

慈善病院でもない營利の私立精神病院に、公費患者を收容するの矛盾性は、次の一例に照らしても明らかであらう。

會て警視廳が、病院の成績良否の標準を、全治患者の多いか少ないかに取つた時代がある。そのころ、毎月統計表が出来て、今月は甲病院は、全治退院率が一番多かつたから、



成績は第一位だ。乙病院は、死亡率がドコよりも多かつたから、成績は最下位だ。

かういふ風に発表するのであつた。

監督官廳の警視廳から、成績不良と折紙を付けられては、私立病院の死活問題である。

私の病院では、損得をはなれて、その生命線を死守する事になつた。

あの公費患者は、少し衰弱したやうぢやないか。朝晩に牛乳を三合づゝのませろ。魚をつけろ。鶏卵の数を増せ。かういふ風になつて来た。つまり、入院料九十五錢也を念頭に置かずにそんな事を超越しての待遇であつた。醫は仁術也、患者の待遇を善くする事は、病院本來の使命であらねばならぬ。

併し營利を以て本來の目的とする私立精神病院に於ては、必ずしも、仁術のみを以て終始する譯には行かぬかも知れぬ。

それから、公費患者待遇の上になつても、又慰安の上になつても、考へて見れば、いろ／＼積極的な方法も、施設もある筈だ。併し何といつても、歸するところは金の問題だ。一日九十五錢

の入院料だけでは、到底世人の期待に添ふ様な満足な事の出来る筈はない。

若し國家が、自ら病院を經營して、そこに公費患者を收容するならば、この矛盾性は、一朝にして雲散霧消するに至るであらう。

衆議院議員山根正次が、國立精神病院建設建議案を帝國議會に提出して、その可決を得たのは、今から二十九年前の、明治四十二年の事だ。もう大概、國立精神病院の實現を見てもいゝころだと思ふ。

差當り、國家が精神病院を設立する事が出来ぬといふなら、乃至は住友三井三菱のやうな大財閥が、かうした事業の爲めに手を染めて、全く營利の觀念をはなれた社會奉仕をやつてくれれば、社會政策の上から見ても、まことにうれしい事だと思ふ。

## 病院の經營を罷むる歌



家のわざつぎてをひさしここにわがやぶれしくつをすつるなりけり  
かにかくに家のわざをばすてにけりしましくはわが歌にかくれむ  
しかすがに人は眉をやひそむらむわがなりはひをこゝにすつれば  
なき親もこれの惱みにいくそたび血を吐くおもひありへたまひし  
古甕のにが酒ふふみ親もわれもはかなき道をふみてひさしき

多磨泉下先考晚翠府君のみたまに告ぐ

なき父にことのゆるよしまうさまく今日をきたれり多磨のおくつき  
たらちねの親の千とせをねむります老松かげにひれ伏すわれは  
ひれふして父のみたまに告げまつる多磨の横山雨に煙る日  
います日にもいふごとくつばらかにことのゆるよしつげまうしたり  
時の潮かへさむすべもなかりきとよみぢにいます親につけなむ  
すみなはのすぐなる道はふみにきとみたまにつげつうべなひたまはむ

うちよする駿河の國の神山の富士にいむかひわがいほりまく  
わが肩のまさしに輕し名山にいむかひていま大きいぶきす  
いほりさすまがきがもとに蘭植うとよしあしびきの山めぐりすも  
ただなはる青山なみに白雲のわける夕はあららぎを植う  
あしびきの山のあららぎわが庵に植ゑし夕の風さぶしもよ  
しまらくは名山にむかひ書よまな重きくるしみ今はあらぬを  
わが心ゆたにたゆたに名ぐはしき山にいむかひ書はよむべし  
二十七松堂文集ひもときて行く雲見れば名をしおもはず  
富士の山さやけき窓に鑿柴舟讀みてかあれば富をしねがはず

新しき事業を成さんことをおもふ

あたらしきたつきのみちをわか行かなくなるしきかせを今かのがれし  
うつし世は廣しまひろしまたさらにさかのよろしきわざあるらしも



あたらしき道をし行けと遠つ世のみおやみおやはわれまもりませす  
わがさがのむきのまにまにたつきして足るとまうさばよしとのらさむ  
遠つ人あをまもらすとおもほへばうつそ身いかで起たでやはあらむ  
ますらをのわがたましひをふりおこしあたらしき道いまたどらまし  
うつそみの生けるしるしにまことあれやわがなすわざの成らむ日もがも  
さ庭べに咲ける日向葵いてる日にいむかふ見れば起つべかりけり  
ひまはりは十尺に長けてくろがねをとかす夏日にひとりいむかふ

父執若林實藏大人に呈す

ゆるよしを大人にはつげつさながらやわがなき父にもいふがごと  
爐をかこみ大人とし居ればよみゆきし父の戀ひしくなりにけるかも  
わがまうすことのもとすゆるよしをつばらにききてよろしとのらす  
世をあげてわれをそしるもなにせむにただこの大人のよしとのらすを

時々の展墓

多摩山のすがたも見えて松かげのよろしきところ父母ねむります  
謙徳院貞清院のふたはしら草葉のかげにわれまもりませす  
ありがたや草葉のかげになき親はからきうきよのあをまもりませす  
み墓べに松黄楊鞠に寒時雨する日を親はさびしとおぼさむ  
み墓の上霜おくときはよみにますわがふた親の寒くおはさむ

去年二月一日は、先考晩翠府君の十三回忌なり

父の行状 わがしるし居ればおのづから胸せまりきて筆はすまはず  
その年にうまれしわが娘十三の春をむかへて髪はか黒し  
わが後をつぐべき男の子十一になりぬとつげむ親のみ墓に  
その頭脳明らかにして冴えし子をかなしきものにまもらせたまへ  
うきこともかなしきこともなき親の墓にまうしてむねはれにけり



黒ずめる煙の落葉をかきあつめ墓守人は火をつけて居り  
落葉たく煙ぞなびく松ばやし松にこもりて鶯啼くも  
よみにますわがふた親もきこしめせ藪鶯は松に居て啼く  
杉村氏の墓とかかししあてびとの野村素介もかくろひましぬ

# 戸山脳病院參觀記

平 山 蘆 江

## (一) 大人氣のお釋迦様

同じ浮世にありながら、世間とは全く没交渉に日を暮す人が澤山ある。其別世界の人々を訪  
問して見たい。

先づ初筆は法學子杉村幹氏經營の戸山脳病院である。牛込區と戸山ヶ原と大久保村とが、三  
角なりに接し合つたところながら、牛込若松町にある戸山脳病院には、今二百人餘りの患者が  
ある。其中には、文學博士も居る。近縣の百萬長者で、市會議員をしてゐた人も居る。淺草の  
長者の後家もゐる。尙角海老の花魁も居た。直訴狂も居た。其中で當時一等の人氣者は、お釋



迦様の生れ變りだと稱する、鹿兒島縣人森永傳太郎君である。此人が市役所の手から、こゝへ引渡されて、預かるやうになつたのは、大正四年の事だつたさうだ。居る事二三ヶ月の後、この森永君は、十月五日といふ日に、突然己は釋迦如來の生れかはりであるぞ。貴様達は知らないのか。と云ひ出した。以來このお釋迦様は、六ヶ敷い佛法言葉を使つては、いろ／＼の豫言をする。大隈侯の病氣は、おれが命令して病ませたのだと云ひ、此次の内閣は松方侯で、其次の總理大臣は西園寺さんだともいひ、又或時などは院長の橋氏を捉へて、この病院の玄關先に黄金が埋めてあるに違ひないから掘出して下さいとせがんで、到頭小使をして二三尺掘下げさせた事もある。のみならず、此のお釋迦様に云はせると、世界統一論といふものが出来る遠からぬ中に世界が統一されて、大きな一つの帝國となつて了ふ。而も其統一をするのは我日本帝國であつて、獨逸、奧太利などは日本の屬國となり、露西亞は保護國となるのださうだ。兎に角世界中が、悉く日本の云ふなり放題になつて、只アラビアと英國だけが、獨立してゐるだけとなるのださうだ。そして其の大事業をやるのは、このお釋迦様ださうで、其のお釋迦

様を世の中に紹介するのは、大靈道の田中榮平氏だとも云ひ出した。私が行つた時に、お釋迦様は、木綿千筋の袷衣に、瓦斯の淺黄縞の袴を穿き、五尺五六寸もある身體を身輕に見せてにこ／＼しながら、少し話を聞かしてやりたいと、院長に申し出た。院長がよろしい、聞かうといふと、一人や二人ぢや不可ない。私は多勢に向つていなければ、饒舌る事は出来ないといひ出す。それではと、五六人の居合せた人々が、そのお釋迦様の前に居並ぶと、釋迦は威儀を正して、説法を始める。それが中々の奇談である。

## (二) 釋迦と問答

お釋迦様は、眞四角に坐り直して、一座をぢろりと見渡した上、  
「さて今日は世界統一論をする前に、貴郎方へ云つて置きたい事がある。そも／＼人間といふものは、上りたがるものだ。私が今貴郎方へ話してあげるについても、貴方は追々に、調子



に乗せられるに違ひないから、其の心を自分で押へながら、聞いてくれなければ困る。其處で本問題に入るが、先づ物價騰貴の問題を説いて、それから世界統一論に説き及ぼし、尙進んで、釋迦の出現といふ事になり、神代の時の事に及び、尙彼の病院内の患者を、私の力で治す意見に局を結ぼうと思ふ。」

と話は時々判らなくなり、飽くまでも廻りくどくなるので、此邊で私は横槍を入れて、お釋迦様と問答を始めて見る。私先づ、

「貴郎の力で病氣が治せますか。」

と云ふと、

「治せますとも、私は釋迦ぢやありませんか。此の病院の氣違ひどもは、皆私の云ひ付で氣違ひにしてあるのです。既に病氣を興へた本人が私だから、私に治し得ん事はないでせう。それが、私がどしどし治してやつたら、こゝの病院は倒れて了ふ上に。院長の顔を潰す事になる。はゝゝ、さうでせう。」

「成程、併し氣違ひにされた人は、可哀想ぢやありませんか。」

「いや、それは氣違ひにする必要があるからする。氣違ひどころか、人間が病氣で死ぬのも私の命令です。私は必要と思へば、何でもやります。」

と云ひかける時、隣室から、若い狂人が飛び出して来て、お釋迦様の頭を、コツンと擲る。お釋迦様、ニコ／＼と笑つて、

「私は釋迦だから、少しも怒りません。何にしても、世の中が、私のかうしてこゝにゐる事も知らない間は、私の目的は達せられない。」

「貴郎の萬能の力で、一日も早く、世間に知らしたら好いでせう。」

「いや、まだ私は知らせたくない。私は御覽の通り、こんな汚い着物を着てゐるから、釋迦としては餘りに貧弱だ。」

「はゝゝ、それもさうですね。」

「實はこの病院の玄關先に、夥しい寶物が埋めてある。其れが現はれる時には、私の容姿も



それによつて出来る。」

「成程其上で、世界を濟度しやうと思ふんですね。其れは何時頃です。」

「世界に大地震のある時です。世界に大地震があつて、其地震の爲めに、玄關先の寶物は現はれて來ます。」

### (三) 御釋迦様の内職

お釋迦様は、字を中々旨く書く。その綺麗な字で、毎日何十枚かの短冊を書いて、その鬱懐を晴らしてゐる。その書散らしの短冊を頂戴して見ると、「松方を内閣總理にするの眞意」、「西園寺を内大臣に成すの眞意」、「鳳輦」、「驚く如き歌」、「此病院の玄關前に恩義金のある眞意」、「釋迦が現はれて驚く」など、云ふ題がそれくくつけてある。そして、その下に、長い文句や短い文句が、綺麗な字で書いてあるが、お釋迦様は、それを皆歌だと云つて居る。一つ二つを

抜き書をして見ると、「釋迦が現はれて驚く」といふ題の下には、

「鏡の中なる鑑ちゃんがり歸り來て煙火が揚がつて居ますねと云つて居た誠一の聲無相妙佛」とある。

「御説明を願ひます。」

と云へば、

「鏡の中といふ事は、人の目といふ事、鑑ちゃんとは、羅漢の漢を、人間に判るやうに云つたので、即ち人の目の玉に、残らず佛が入つてゐるといふ事です。誠一の聲といふのは、即ち私自身の事で、今の世間に釋迦が居たのかとばかり、皆が驚いてゐるところです。」

と説明してくれる。

「無相妙佛とは何です。」

と聞けば、

「お釋迦様とは、人が命けた名です。釋迦自身は、無相妙佛と云つてゐます。一體釋迦の名は



七百八十餘もあるのだから、君たちには、迎もおぼえ切れまいと思ふ。」

と云ふやうな説明をする。私がこれらの短冊を、難有がつて頂戴すると、お釋迦様は、言葉を改めて、

「貴郎は矢鱈に、私の歌ばかり貰ひたがるが、短冊ぐらゐ持つて来てくれなければ困る。」と云つて笑つた。無相妙佛事、お釋迦様は、かうして毎日、状袋貼の内職をやつておいでになる。

かういふ暴れない狂人は、大抵状袋貼をやつて、時間潰しをやるやうになつてゐるので、區役所や、警察からまはされる狂人は、すべて一日食料薬他全部を含んで、五十一錢だけ府から下るやうになつてゐる。それを公費患者と云ひ、私費は、個人から預かつてある患者である。私費の方は、一日八十錢以上、三圓五十錢といふ入院料なのだから、自然ここに入院してゐるほどの人は、相當の資産家でなければ出来ない事である。だから、文學博士や、近縣の百萬長者などがゐるのは無理もない。

橋院長の話によると、精神病といふ病氣は、金持に多く、そして、梅毒性のものが多いさうで、男の患者は、大抵物を云はなくなる人が多く、女の患者は、お喋りになる。又男は色情の事を、非常に嫌ふやうになり、女は十人が十人まで、色氣違ひのやうな形になるさうだ。中にもお婆さんほど、色氣が多くなるといふ。

### (四) 氣狂ひと喧嘩

例の直訴狂といふのも、この病院に預けられてゐたが、何を見ても何を聞いても、皆自分の力によつて成された事のやうにいふ氣違ひであつたさうだ。

大隈侯が、天下青年の奮起を望むといふやうな事を云つたと、新聞に書いてゐるのを見るとあれは俺れに内閣を譲らうとしてゐるのだと云ひ、奈良朝時代の繪を復活させるのは、俺れの仕事だと云つてゐる。ところへ貴顯が京都へおいでになると聞けば、ソレ／＼、私の仕事の補



助をして下さる爲めなのだといふ。直訴の時などは、墜落しない飛行機を造つたので、皇后陛下下へ上奏してあるが、陛下と一度拜謁を得さへすれば、採用されるに定つてゐるのだなぞと云つてゐたので、其墜落せぬ飛行機といふのは、翼の下に、も一つ大きい翼をつけて置くのださうだ。さうすれば、いざ落ちるといふ時に、下の翼に旨く受け止められるといふ仕掛だと云つてゐる。而も直訴狂君が、これを發明した動機は、不用のハガキを、庭へボンと捨て、其のハガキが落ちる機みに考へたのだとある。

非常に理屈っぽい先生もゐる。其れは愛知県の人で、可愛い子供を先立てた爲めに、狂氣したのださうだ。子供が長く病みついた時、其主治醫は、一旦匙を投げたが、親が泣きつくので、止むを得ず、申譯に一本の注射をしながら、

「此の注射が利いたら、豌豆に花が咲きませうよ。」

と云つた。その文句が、氣に食はないといふのが興奮の始まりで、結局子供が死んだ時、

「あの醫者は、始めから殺す氣で注射をしたのだらう。其様奴には藥價を支拂はない。」

と云ひ出した。すると、賣言葉に買言葉で、醫者の方でも、

「藥價を拂はなければ診斷書を書いてやらない。」

と云つた。双方云ひ募つた揚句、警察へ行き、裁判へ持出し、司法大臣官舎まで飛び込んだ爲に、警察の手にかかつて、この病院に入れられたのだ。朝から晩まで、豌豆に花と、診斷書との、二言ばかりを云ひ暮してゐる。子供の死亡診斷書を手に入れるといふ事は、私の終生の事業であると威張つてゐる。そして誰の顔を見ても、この裁判問題を持ち出して、條理整然と論じ立てるさうだ。

又或時は、此様な事もある。或る人の女房が發狂したので、入院させておいて、二三日経つて夫が見舞に行くと、女房は顔を見るなり、良人の横面を撲り倒した。どうせ氣違ひの事で、底意はないにきまつてゐるのに、良人は眞赤になつて怒つた。そして忽ち氣違ひを相手に本氣になつて取組合ひを始め、双方疵だらけになつて、良人は、

「手前なんぞ見舞つてやるものか。」



と云ひ捨て、疊を蹴立て、歸つて了つたさうだ。

### (五) 夫婦と母娘の狂人

或夫婦が居て、相當な生活をしてゐたが、女房は天理教信者となつた。信じて行く中に、度を外して家のものを、何から何まで、天理王様へ奉つる。亭主が止めても聞かない。餘り止める中に、亭主が風邪でも引けば、

「ソレ天理王様を信じないから、罰が當つたんだ。」

と云つては、例のお水を無理に飲ませ、癒つたと云つては、天理王様のお庇だと、無理に引立て、亭主に參詣させるといふ風な事を繰返してゐるので、亭主もよい加減にして置くと、女房の信心は愈當じて来て、家の財産は、大方天理王様に奉納して了つた。すると、或る晩、亭主は突然飛び起きて、天理王の尊と、女房の口眞似をしながら躍り出した。始めの中は、扱

こそ亭主も、私の熱心によつて、信者になつたのかと思つてゐたが、漸々見てゐる中に、どうも本氣ではないらしい事が判つた。女房の天理教妄信が、いつの間にか、亭主の心を痛め盡した揚句、自分も氣味が悪いにつれて、神様の罰といふやうな事を感じ出し、それが頭に凝りかたまつて、氣が狂つたのださうだ。かうなると、女房も天理王様ばかり頼つても居られない。亭主を病院へ荷ぎ込む事になつた。そして、亭主の見舞もし、家の用も片付けてゐる中に、心細さが増して、自分までが狂氣して了つた。そして、夫婦揃つて入院の身となつたが、もうその時には、財産といふものは、全く天理教の爲めに傾け盡してゐたさうだ。此の夫婦は、一年餘の入院の後、全治して退院し、今は改めて、夫婦共稼ぎの身となつてゐるさうだ。

こゝに憐れな話がある。それは道樂な親を持つてゐる娘が、それを苦勞にした揚句、發狂して入院する事になつた。母親はそれと聞いて、追に濟まないとと思つたらしく、殊勝げに娘の見舞にやつて來た。

「病氣はどうだい。」



と心配さうに尋ねてやつても、娘は一向判らないで、取とめもない事を饒舌つてゐる。それが皆、自分の不仕儀から引起したのだと知つた時に、母親の心はボーツとなつた。そして、其場から發狂して了つて、母子一緒に入院する事となつた。やがて娘の方は、元の身體になりかけたが、母親は夢中である。餘りオーオーと泣いてゐて、果てしがないので、娘に逢はしたら、少しは正氣に戻るかといふので、應接間で、

「お前の娘の病氣は治つたのですよ。」

とよく／＼言ひ聞かせながら、娘を引合はしてやると、娘は始めて母の狂氣を知つて、

「お母さん治つて下さい。私はこの通り元の身體になつたんですよ。」

と大聲を擧げながら、取すがつて泣いたさうだ。其の憐れさには、病院中貰ひ泣きをしたと、今も尙一つ話にされてゐる。

## (六) 徳川様のお妾

男の患者中の人氣者、お釋迦様と相拮抗して、女患者の方には、徳川龜之助様のお妾だつたといふ盲目の狂女がゐる。龜之助といふのは、徳川家達公の幼名に當つてゐる。此の老女の前に立つて、私は、

「暫くだつたね。」

といふ。

「どなたでした。」

と盲人は首を傾げる。

「私の聲が判らないか。よく考へて御覽なさい。」  
といつても、



「判りませんね。」

といふ。

「徳川さんに近頃逢ひますか。」

と聞く。

「逢ひませんとも、どうしても、逢つて下さらないんですもの。」

「一體、いつ別れたつ限りですか。」

「四年前でした。此處へ来る前でしたから。私と自動車に乗つて御邸へ行く時、時計の下でね始めて、俺は徳川龜之助だと仰つたんです。それ以來、どうしても逢つて下さらないんです。」

「して見ると、それまでは、名乗らずに逢つて下さつたんですね。」

「さうです。」

「お忍びで見えたんですか。」

「お忍びぢやありません。よく来て下さつたんです。貴郎は、其様事を知つてゐるところを見ると、前田龜太郎さんですね。さうだくさうに違ひない。」

と極めてゐるので、私も其の氣になり濟まして、

「到々判つたか。随分逢はなかつたね。相變らずお達者で結構。」

といへば、

「貴郎もお機嫌よく。」

と鄭重に、併しそれ者らしくお辭儀をする。

「徳川さんは病氣しとるよ。」

と口から出たら目に云へば、

「嘘です、知つてますよ。」

といふ。

「誰か逢ひたい人はないか。」



といふと、

「ありますとも。」

「誰に。」

「私の夫に。」

「夫といふのは誰。」

「だつて、判つてゐるぢやありませんか。徳川龜之助さんですとも。」

「龜之助さんは、貴女の亭主か。」

「さうです。菊池コレマサもさうです。松岡もさうだし、高槻もさうです。澤山ゐますよ。」

「へえ、して貴女の亭主は、随分澤山あるんですね。」

「え、名前は澤山あつても、皆同じです。」

「名前を變へてるの。」

「いゝえ、身體も名も違つてゐるんです。だけど、皆同じ亭主です。」

「はゝゝ、さうですか。」

「それはいゝけれど、徳川さんを連れて来て下さる。」

「こゝには居ない。」

「居ますよ。こゝの院長さんが、龜之助さんに違ひない。」

「院長さんが。」

「え、さうです。私は吉原である人に馴染んだんです。吉原で私が少將と云つた頃だつた。

品川へ行つて、小稻となつたんです。だけど、其様事はどうでも好いけれど、早く私を歸ら

して下さい。此處にあれば、私は結構です。龜之助さんも居るし、それに、本所の中の郷元

町には二千四百人の子供がゐるんだし、かうして別荘住居だから、氣樂なもんですがね。氣

樂だ氣樂だと云つては、肝腎の仕事が出来ないんですもの。」

「貴女の仕事つて何です。」

「澤山あります。」



(七) 二千四百人の子

「仕事なんぞ打棄つたら、目のよい人達が、さつとやつて呉れるでせう。」

「いえ、駄目です。人任せは駄目です。第一、お米が出来ないぢやありませんか。それに、國々の用事が少しも片付きません。」

「國々とは。」

「あんな事を云つてら、知つてる癖に、越後にも、仙臺にも、方々に地面があるでせう。皆滅茶ですよ。私が行かなければ。」

「ぢや行つたら好いでせう。」

「さあさ、行くから目を見えるやうにして下さいよ。二時間だまつて坐つてゐると、目は見えるやうになるんですかね。」

「ぢや二時間黙つてゐたら好い。」

「ところが駄目です。夫婦揃つてでなければ。」

「中の郷元町に、二千四百人もゐるといふ子供は誰の子です。」

「私の子さ。」

「貴女と誰の間の。」

「徳川龜之助さんとの間の子です。」

「二千四百人もゐるんですか。」

「えゝゐますとも、皆私の行くのを待つてゐるんですよ。」

「そんなに、子供があつちや大變ですね。」

「なあに、私は仕合せですよ。これで目さへ開けば申分ありません。」

「一體何時 戻れたんです。」

「三十年前です。」



「何でつぶれたんです。」

「天然痘でさあね。顔の皮一皮、私が剥いちやつたんですよ。餘り汚くなつたから。そしたら目まで剥けたんですよ。何しろ、早く目をなほして、早く龜之助さんを連れて来て下さいよ。一體、この人達は、私を龜之助さんに、逢はせまい逢はせまいとしてゐるんですもの、随分酷いね。龜之助さんに逢はない間は、こゝ一寸も動かない。いや〜〜。」

と身體をゆすぶつて、床の上へ坐つて了つた。其れを、無理になだめて立たせて、歌詠婆さんといふ陽氣な婆さんに面會する。

應接室の床の間にかけてある、金井之恭の七絶をぢつと見ると、

「七十の手習ひ花がひらく。」

といふ様な事を大聲に怒鳴つて、首をひねりながら、

「旨いもんだな。あれは、私が詠んだ歌なんだ。あゝ旨い〜。」  
と獨り感心してゐる。

「お前さんに歌が詠めますか。」

「詠めるとも詠めるとも、俺は大先生ぢや。」

「何が好きだい。」

「先づ歌俳諧だな。」

「へえ、歌俳諧、洒落たもんだね。」

「あゝ、洒落てるとも、題を出しておくれ。何でも詠んで見せるから。」

「よろしい。先づ五月だから、皐月といふ題をあげやう。」

「さつきだね。よし〜、皐月より汽車と電車が走るなり。どうだ旨いだらう。」

と馬鹿〜しい大聲で、節をつけて吟ずる。

「變な歌だな。」

「これを變な歌だといふお前の方が、餘程變だ。」

「も一つ題を出さうか。」



「何でもお出し。さあ何がよい。」

「それでは、青葉といふ題だ。」

「青葉か、よし／＼さあ詠むぞ。」

(八) モルヒネで發狂

歌よみ婆さん、巻苜を鼻の先へ唧へて、一寸天井を見ながら、

「よをこめて提灯で聞く蟲の聲。どうだ。旨いだらう。」

と煙を輪に吹く。

「青葉といふ題になつてゐないぢやないか。」

といへば、

「青葉になつてゐるさ。よをこめてといふ夜が、青葉の世の中だから、それで青葉さ。お前さ

んは判らない人だね。さあ何でも持つて來たまへ。私が皆歌にしてやる。」

「もう歌は好いから、お婆さん、お前の身の上話を聞かうぢやないか。」

「身の上話も亦一興、ツツツン。」

と止度もなく饒舌つて、此方のいふ事は、一向聞かない。

「お前も若い時には、随分美しい女だつたらうね。」

「それあ、好いとも好いとも、何しろ、俺が自動車に乗つて通るのを見た奴は、三日三晩、目について忘れられなかつたといふ位の、素晴らしい美人だつたよ。」

「それほどの美人の相手に廻つた男は、誰だらう。」

「男、私の良人は千早振命。」

「何だい、それは。」

「神様のやうな美しい男さ。」

「その男と、どうして別れたの。」



「別れやしない。今でもちゃんとゐる。千早振命、それはく、好い男だよ。見せて上げやうか。」

「あゝ、見せておくれ。」

「それッ。」

と云ひさま、油断を見すまして、私の横腹をポンと打つてついと逃げて了ふ。そして、二間ほど離れたところで、コラ／＼と踊つてゐる。

其次に、若い女を手招きすると、丁重にお辭儀をしながら、馬鹿々々しい遠慮をしいく私の前に跪く。色は浅黒いが、相當の顔立を持つてゐたが、頭の毛は、一尺ばかりで、切り揃へられてゐる。此女は、吉原で女郎になつたのが、振出しで、一旦受け出されて奈良の農家に世帯を持ち、姑との折合が悪くて、再び大阪の松島で、勤め奉公をし、鞍がへをして、洲崎へ飛び、それから、銘酒屋女になつたといふ暗いところばかり通つて來た女ださうだが、かういふ所を轉々してゐる間に、悪い病氣にかゝつて、モヒ注射を、盛んにやつてゐたのが、却て毒と

なりモヒ中毒の爲めに發狂したのだといふ。併し一年間の入院で、その精神状態も殆ど治つて一二ヶ月中に、退院する事になつてゐる。

「大變な目に逢ひましたね。併しもう全快だから安心です。」

「ハイ、これも皆院長さんや、事務員の方のお蔭でございます。」

「もう矢鱈な注射なんぞしちや、不可せんよ。」

「ハイ、もう懲り／＼しました。」

「愈退院したら、お亭主の側へ行くんでせう。」

「いえ、私のやうなもの、其の亭主にも見捨てられてしまいました。」

「何あに、そんな事はない。併し行くところがなければ困るでせう。」

「ハイ、何處か堅氣の奉公口でも探しまして、當分何とか致さなければなりません。」

と、いふ事は至つてしつかりしてゐる。



(九) おたからさん

「昔のおのろけでも、聞かしてくれないか。」  
と碎けて見ると、

「いゝえ、どう致しまして、其様ものがあるものでございますか。それに、私はどうでも宜う御座いますが、連れ合の恥になりますから。」

と飽くまで尤もらしい。これでは、正氣の私の方が、すっかり恐縮して、一言と馬鹿口が利けなくなる。

「何れ退院しましたら、寄邊のないものでございますから宜しく。」

と云ひ捨て、しとやかに席を立つた。すつかり私は鼻を開かされた形でうしろ姿を見送つてゐると、此女、向ふに立つてた事務員と、顔を見合せると、ゲラゲラゲラと、止め度もなく笑

ひこけながら、猥褻な真似をしてゐた。

其次に、私が出つたのは、お寶さんといふ五十位の婦人である。此人は、立派な由緒のある人で、息子は、現にお役人として、相當の勤めをしてゐる人である。此婦人、自分の事を神女と稱し、自分の行く處は、何處でも繁昌し、自分の體に、一寸でも觸れば、福が授けられるから、それで、世界中が、自分に來てくれ〜と云つてゐると信じてゐる。

先私は鄭重に、其前へ座つて、お辭儀をしながら、

「貴女の福を、私は授けて頂きたくて、態々まゐりましたが。」

と云へば、お寶さんついと立つて、押入から、取出したのは一本の扇子、これを、真直ぐに笏にとつて、嚴かに座りながら、

「貴郎は何處から來なすつた。」

「へい、東海道筋の田舎の者でございます。」

「何といふ名前だな。」



「名前などあるものではございません。」

「さうか、私の福を授かりたいなど、其様子見を起してはいけない。私の身體に御光が映すと見えて、近頃世間の人が、皆其様事を云ふが、それは間違ひぢや。先日、三州から東京へ出て来た時に、東京驛で車夫を呼ぶと、車夫が私に膝かけをかける振をして、私の膝に手を觸つたが、あとから氣が付いたら、矢張り私の着物に觸つても、福が授かるものと思つてした事なのださうだ。併しそれは大違ひで、決して、其様事のありやう道理はない。只私は神女で、神女と始終往復してゐるものだから、私に縋りさへすれば、何でも協ふものやうに、凡人どもが思ひひがめたのぢや。」

「併し貴女の評判は大したものですよ。」

「それは當り前さ。私は神女だから。」

「三州においでになつたのですか。」

「こうぢや。」

「東京へは、何ういふ御用でお見えになつたのです。」

「東京の政府が、私に来てくれ〜とやかましく云ふもんですから、三州の方も忙しかつたが無理に外して来たのです。」

### (十) 物價騰貴の騰因

「東京の政府から、貴女をお呼びになつた御用は何です。」

「貴郎は失禮な事を仰る。東京の政府が、私を呼んだのぢやない。どうぞ、来て下さい、下さいと云つて、頼みに来たから、私は来てやつたのです。」

「いや、どうも濟みません。云ひ損なひです。そして、どんな頼みがあるんです。」

「それはつまり、物價騰貴で困るからといふのです。」

「貴女のお力で、物價を安くさせてくれと云ふのですか。」



「つまりさうです。私の行くところは、悉く都合がよくなるから、八方で私を呼びます。」  
「それでは、随分お忙しいでせう。それで、貴女は何をなさるんです。」

「何もしないで、かうしてゐれば好いのです。」  
「大したもんですね。」

「さうです。私は神女だから。一體私に云はせると、日本の政府といふものは、交際の手を擴げ過ぎてゐます。獨逸も、佛蘭西も、英國も、あめりかもと云ふ風に、調子に乗つて、いろんなところと交際を結んだものだから、今更それをどんなに纏めやうかと、自分で困る事が出來上つてゐる。それが又、物價騰貴の原因になつてゐるのです。どうも苦々しい事です。歐羅巴の戦争だつて、實はお互に交際を擴げ合つた爲めに、此様事になつたので、そして相變らず、物價騰貴に困つてゐるのです。」

「して見ると、世界中が物價騰貴なのです。」

「さうです、そりく、物價騰貴のはじまりは、去る御大典の頃、五節の舞を踊らせる爲めと  
いふので、いろくの娘さんが、幾人もく鬼にさらはれた事がありませう。其時以來、お福踊りといふものが流行り出して、其のお福おどりを教はる爲めに、世界中の女は、随分苦しんで居りましたが、つまり、お福おどりが、結局物價騰貴の因になつたのです。どうも實に困つたものです。」

とおたからさんの叔母さん、中々經世策に明るい。六ヶ敷い議論を並べ立てる果は、所謂お福おどりなるものを踊りはじめた。

目がすはり、顔の色が變り、物凄くなつて、何時飛びかゝつて、其處中の人に食ひつくかと思はれる有様になつて來る。私は怖いから、

「もう判りました。お福おどりは、よく判りましたから、他の話をお聞かせ下さい。」  
といふと、

「いや、お福おどりの事から、順序を立てゝ行かなければ、凡人には判りにくいものです。其處で、其のお福おどりと、今一つ世の中に不都合な物がある。それは、耶穌教といふもので



す。一體彼奴等は、鍋を振まはして、世の中の目をくらましてゐるが、あの鍋の中には、サツカリンといふ毒薬が入つてゐるんだ。」

## (十二) 人骨の粉が飛ぶ

「耶蘇教が、鍋の中のサツカリンを、東京中へ振まはして、世界中を、人骨の粉だらけにしてゐる爲めに、ソレ御覽なさい、二尺も先の方は見えなくなる位でせう。困つたもんです。この人骨の粉が、もや／＼してゐる爲めに、物價騰貴も起れば、世界戦争も始まる。人間の根性も曲つて了ふし、それから、日本人が日本を忘れて、西洋の神様を信心する事になるのです。今、日本中戦争だらけですよ。殊に三河の國から西へかけては、大戦争の混亂最中ですから、彼方でも、此方でも、私に來てくれ／＼と、私の身體は、幾つあつても足りない位だが、大抵なところは、打棄つて置いてやるのです。其中に、ぼつ／＼廻つてやるつもりで

すが、何しろ、東京の政府が、うるさく物を尋ねに來るので、閉口してゐますよ。」

とおたからさんは、さも／＼、五月蠅さうな顔をしてゐる。

「政府が貴女に何を聞くのですか。」

「何でも聞きます。支那の方は何しやうの、米の價をどうしやうの、ソレ／＼、又何か云つてゐる。あゝうるさい／＼と、身體をゆすぶつて見せる。お寶さんの耳の側に、神様のお使ひが始終居て、それが、何かと世間の事を取次ぐのださうだ。それが、即神女の神女たる所以であるらしい。」

「成るほどね。人間も神様に近よつて來ると、豪勢なもんですね。それでは、貴女のお目にはいろ／＼な神様が見えませうね。」

「え、見えますとも／＼、釋迦などは、のべつに逢つてゐます。」

「釋迦と云ひますと、矢張り世界統一を唱へる釋迦ですか。」

「馬鹿な事を仰しやい、釋迦などに、世界統一が出来るもんですか、お釋迦様といふものは、



方々のお寺へ頼まれて、黙つて坐つてゐれば可いのです。」

「あゝさうですか。この外に、どんな方とお逢ひになりますか。」

「日蓮上人などにも、屢々逢つてゐる。日蓮といふ人は、中々人品の好い人ですよ。それから天神様、これは少し吝ん坊だが、悪氣はない。何と云つても、一番偉いのは、天照皇太神さまだ。大したもんです。お美しい方ですね。」

「天理王命はどうです。」

「あゝ、あれはおつちよこちよいさ。あんなものは仕様がな。それから困りものは、西京の西本願寺ぢや。一體彼處には、光瑞といふいたづらな男が居て、彼奴が、いろく馬鹿な事をやるもんだから不可ない。尤も先頃お廢止になつた筈だが、彼奴が、嘴を容れる爲めに、政府でも大分困つてゐたらしい。さういふ男を飼つて置くので、例の西本願寺も、邪魔もので私を大分困らしたが、あんまり彌次馬の隊長をやるので、これも私の計らひで、先頃既に政府に云ひつけて置いたから、もう既に兩本願寺とも、取壊しになつた筈ですが、どうで

す。」

「つい存じませんが、私が昨日通つた時には、まだちゃんとしてゐましたよ。」

「それでは、その後で壊したのだらう、あれは、二つとも社會に害毒を流すもので、矢張り耶蘇教と同じやうに、人粉を振り撒いてゐます。」

## (十二) 来る六日は大地震

「兩本願寺は、かうして餘り彌次馬をしますから、取壊しを命じましたが、其跡の地面を、其儘にして置いては、又々悪い事を企てる心配があります。其れを防ぐ爲めに、彼處へ、大きな芝居小屋を建てる筈になつて居ります。」

「あ、さうですか、門徒の人達は、本願寺様がなくなつて困るでせう。」

「いや困りません。あれは人粉で繋がつてゐる信者ですから、其の人粉を撒き散らかす奴がな



くなれば、自然本願寺の難有味を忘れて了ふ譯です。」

「いやいろく難有うございました。又伺ひますから、どうぞお寶を授けて下さいまし。」と私が立ち上らうとする時、

「あ、一寸待ちなさい。新宿の大木戸へ行つて御覽、兩本願寺を取壊した煉瓦が、百二十六枚と、瓦が四十八枚積み上げてありますよ。」

と呼びかけた。

扱此の位にして、私は其日、戸山脳病院を出たが、三日経つて、お釋迦様へ返禮の爲め、新しい短冊を持つて出かけて行つた。お釋迦様は、喜んで私を迎へながら、

「貴郎は都新聞の人で、私の話を書いたさうですね。新聞材料なら、私のところで、二時間も話を聞いて御覽なさい。二十日位書く材料がありますよ。先日も頭山満へ四十枚、床次竹二郎へ四十枚、短冊に歌を書いてやつて置いたが、まだ橋院長が届けてくれないらしい。あれが届けば、一寸面白い事が出来上るのだがね。」

「さうですか。時にお釋迦様、先日仰つた世界統一はいつ出来るでせうか。」

「大分近よりました。来る六日は、天拜日ですから、六日でせう。六日に大地震があります。」

「六日は慥ですか。」

「いや、慥とは云はないが、六日を外れると、十六日です。それが外れると、二十四日です。すべて、八といふ数が天の示す数ですが、これは印度の事ですから、日本へ来るまでには、十六になり、二十四になるのです。」

「私が貴郎のお説を書いた新聞を、お読みですか。」

「いや、読みません。併し讀まなくても、私は判つてゐる。貴郎の靈と、私の靈とが相通じてゐるから、一體この病院の奴等は、凡人だから、私といふものを知らないで、いろくな事を云ふが、私は都新聞に書かれた事は、天雲を掴むが如と云つて、済ましてゐるのです。」

「して見ると、私の書いた事は間違つてゐますか。」

「いや、少しも間違つてはゐない。只凡人に判らないだけだ。ナーニ凡人どもは相手にならな



い。私は病院にゐて頭を殴られやうと、突飛ばされやうと、氣違ひどものする事だと思つて相手にしません、其代り世間へ出れば、桂太郎でも、頭山満でも、眞向からボンボンやつ付ます。貴郎などは、蠅蟲とも思ひません。併し今はボケの眞似をしてゐます。」

### (十三) 基督のお弟子さん

「私はこれで支那にゐる時は、随分日本帝國の爲めに働いたものです。日露戦争の時に、支那役人を一人殺した。それから、露西亞人も随分殺した。これが、皆日本國の爲めです。桂太郎などは、私にビリ／＼してゐます。俺は支那の役人を殺したといふ報告をしたところが、慄へ上つて、シツシツ其様事は云はないでおいてくれ。國際關係がやかましいからと、青くなつて云ひました。何しろ、日露戦争があんな好結果に行つたのは、私が自分の懐金を二圓二十錢投げ込んで働いた爲めです。」

と夥しい氣焰を吐く。

すると、お釋迦様の側へ立つて、話を聞いて居た男が、突然、

「ワハハハハ」

と大聲で笑ひ始めた。お釋迦様は、其の男を顧みながら、

「是れは基督の弟子です。私とは仇同士の男です。併し仇同士だが、中々心憎い男で、私の話の判る奴は、此病院中にこの男ばかりです。井上といふ名です。」

と私に紹介する。すると、井上基督君は、哄然として、

「お釋迦様、お釋迦様、君多くを語るに及ばず、其様小むづかしい事を、百萬だら並べるより只一言にして盡きるよ。」

といふ。井上君は、若い色の白い、キリツとした男振で、これもお釋迦様に劣らぬほど丈が高い。そして、五分刈にした頭へ、向鉢巻をしてゐる。

「只一言とは、」



と私が聞くと、

「曰く、尊王攘夷が尊王外征になっただけさ。尊王攘夷鎖國主義が、尊王外征開國主義に變つたまでの話さ。それから今一つ、河野有通と日本海々戦とが國の根本だよ。」と云ひます。

「なるほど、河野有通といふと、元寇の亂で働いた勇士だね。」

「さうです。神風です。」

「面白い〜、お釋迦様、如何です。井上君は、中々面白い事を云ひますね。」

「さうでせう。此人は好い頭を持つてゐます。氣狂ひにして置くのは惜しい。」

と釋迦がいふと、基督のお弟子が、

「お釋迦様はつまり世界大帝だから、僕は世界大統領です。」

と云ひ捨て、ヌイと行つて了つた。

お虎ちゃんといふ名物女がゐる。この女は、當年四十一歳、男の顔さへ見れば、畢丸を握む

といふ癖のある女で、病院の事務員などが、其の部屋へ入つて行くと、突然首つ玉へかちりつく位、入院の其の日に、診察をした橋院長に向つた、

「どうぞ女房にして下さい。」

と頼んだといふ逸話を残してゐる女である。其のお虎ちゃんに私は逢つた。私は机を小楯に取つて、お虎ちゃんに飛びかかれるのを、一生懸命警戒しながら、話を始める。

#### (十四) 亭主を欲しがる女

「お虎ちゃん、私はお前さんを身請しに来ましたよ。」

と私は笑ひながら、カマをかけて見ると、お虎ちゃんは、呆氣にとられて、私の顔をぢつと見てゐる。

「どうだ。身請されるのはいやか。」



と云へば、

「本當ですか、嘘でせう。」

と目を光らせる。

「本當だよ。」

といふと、お虎ちゃん、一足々々私の方へ近寄りながら、やがて机の角をまはつて、顔を近々と差寄せ、

「どうぞ身請して下さい。私はもうここにゐるのが、辛くて堪りません。」

「何が其様に辛い。」

「だつて辛いに違ひないぢやありませんか。茲へ入つてから、私は丁度四年になりますよ。四年もこんなところにゐるのが、辛くなくつて何するもんですか。」

「ここは病院だぜ。御飯を食べさせてくれて、薬を飲ましてくれる病院だよ。加之に、麻糸つなぎをさせて、お前さんに小使ひを儲けさせてくれる結構なところぢやないか。」

「それは結構です。結構ですが私には辛い。」

「どうして。」

「だつてお前さん。私は御覽の通り、見る影もない女ですが、まだ四十五です。こんな若い盛りですもの、男が欲しいのは當り前ぢやありませんか。誰が何を云つても、私は早く娼婦へ出て、一日も早く定まる亭主を持ちたい。貴郎や、どうぞ身請をして下さい。」

「よし、それは尤もな事だ。では身請をするが、何處かに好きな男がゐるかね。それを先に聞いて置かう。」

「其様なものは居りません。けれども、兎に角ここを出さへすれば、私は私の考へで、一時この院長さんの家の、おさんどんにでも雇つて貰つた上、それから先は、院長さんにも私の氣心が知れませうし、私も院長さんの氣が知れたら、何うにでもなるに極つて居ります。院長さんがいやなら、事務長さんでも、看護長さんでも、誰でも好い。私は決して不足は云ひません。私を世話してくれる男でさへあれば、鱈でも、鯨でもちつとも厭ひは致しません。」



「一寸待つてくれ。餘でも鱈でもとは何だえ。」

「お前さん知らないのか、鱈は鱈ひげ、鱈は鱈ひげさ、私は職人であらうと、町人であらうと一切構はない。私を可愛がつてくれる人なら誰でもいゝ。私だつて士族の娘でありながら、此様ところで、皆に悪口を云はれながら入つてはゐられない。第一、國の人に見つともないぢやないか。」

「國は何處だ。」

「國は加賀です。石川縣の士族の娘で、貧乏をした爲めに身を賣つたのさ。そして、金澤で三ヶ所、それから越後へ行つて、北海道へ行つて、吉原にも、新宿にもゐた事があります。」

「ホー、随分まはつたね。吉原は何處にゐた。」

「新あづまにゐた。」

### (十五) 失戀から發狂

「新あづまにゐる時は、私はちつとも賣れなかつた。それでも、親方が俺をよく可愛がつてくれたよ。」

「言葉が少しぞんざいになる。」

「何といつて可愛がつた。」

「此の女は面は醜いが、氣立の可愛い奴ぢやと云つたよ。そして、お茶挽いても黙つてゐた。私は悪い事をした事がない。どうぞ身請をしておくれよ。」

「よしよし、それだけ聞けばよい。身請をしやう。」

「何時してくれる。」

「直ぐにでも好いが、一旦出なほして來なければ、都合が悪いからね。」



「そんなら、今度は何時来てくれるの。」  
 と昔の後朝の文句を、今尙忘れず、私に向つて睜し目を使ひ始める。愈形勢が險悪になつたので、私は少々逃げ腰になりながら、机を小楯にとらうとする間もあらせず、お虎ちゃんの素敏こい手は、突如と延びた。ハツと思ふ間に、私の手はお虎ちゃんにしつかと握られてゐた。苦笑ひしながら私は、

「あゝよしよし屹度来るよ。」

といへば、

「何時来るのさ。」

と念を押す。仕方なしに、

「三つ寝てから来てあげる。」

といふと、

「屹度よ〜。」

と握つた手にぐい〜と力を入れる。

「ああよしよし。」

と云ひながら、逃げても〜、手は離れない。様々にだましますかすと、女は大聲をあげて泣き出した。そして、

「屹度よ屹度よ。」

を繰り返しながら、出て行つた。

素人下宿をして居る時に、止宿させた齒科醫學生と好い仲になつたが、男が逃げた爲めに、廣島まで追ひかけて行き、どうしても男に逢はれないので狂氣した。そして廣島の新聞に四日つきで、其戀物語を連載された女もゐる。此女は、一旦病氣は治つて、東京へ立戻り、又早稲田で素人下宿を始めたが、其の素人下宿へ、淫賣婦を泊めた爲めに、忽ち白首屋といふ嫌疑の下に、十九日間の拘留を食つた。生れて始めて留置場生活に驚き、且其處置の不當を憤つて、刑事を罵倒してゐる中に、又發狂して、戸山脳病院へ引渡されたのださうだ。



「一體、どうして此處へ来るやうな事になつたのです。」

と聞くと、尤もらしく笑つて、

「其様話は過ぎ去つた事で、人様に聞かれては、恥かしいから申されません。」

としとやかに云ひながら、懐から筆の軸を取り出した。

「まあお恥しい。煙管が買へないものですから、此様有様ですよ。どうぞ見ないで下さい。」

と小聲で云つて、件の筆の軸へ煙草をつめて喫む。其の姿が如何にも痛々しい。年は四十一ださうで、着てゐる着物も汚いが、人品は相當によい。そして、かういふ姿になつた原因の醫學生は、岡本と云つて、まだ二十四五の男ださうだ。

## (十六) 皇族と神様の子

「恥かしがる事はない。一體、どうして此様とこへ来るやうになつたのさ。」

と押しかへすと、

「私が不束なものですから、刑事さんに叱られたのですよ。さうして、それを又やり返したものですから、留置場へ投り込まれたのです。私は氣なぞ違つてやしません。」

「それあ壓制だね。」

「ハイ三四年前でした。早稲田で素人下宿をしてゐますと、一人の女が、部屋を貸してくれと云つて來ました。それで深くも調べずに貸しますと、お圍ひ者だと見えまして、旦那らしい人が時々來ます。只不思議な事には、夜來て、朝は夜の明けない中に、コソ／＼と歸るのですが、それも、其の旦那の家の都合だらうと思つて、打棄つて置きました。私は他の事より自分自身にかゝつた事で、夢中でしたから、一向お構ひなしで居りますと、或日突然女の留守に、刑事さんが見えまして、お前はあの女を家に置いて、地獄やなどをしてゐたのだから。不都合な奴だと怒鳴るものですから、私もむつとしました。私は宿を貸しただけです。其様疑ひをかけられては、迷惑千萬ですと云ひましても、刑事さんはちつとも承知しないで



私を留置所へ投げ込んだのです。くやしくて／＼堪まらないから、私も今で考へれば女らしくもない事ですが、刑事さんに随分酷い悪口をしたのでございます。そしたら、忽ち氣狂ひだと云ふので、此方へ送られました。此方へ来て見れば、皆さんが親切にして下さいますから、追々に氣が落ち付きました。只今では、もうこの通り全治いたしました、あとで聞きますと、あの女は、東京中で知らぬ人のない淫賣だつたさうです。」

と飽くまで話の筋が通つてゐる。此方は、いつか狂女といふ事を忘れて了つて、應對してゐると、おつねさん、私の顔をぢつと見て、

「貴郎は新聞記者でせう。」

といふ。

「何うして。」

と聞くと、

「貴郎のお顔は先日拜見しまして、よく覚えてゐます。」

と圖星を指した。

私は驚いたが、此ういふ患者は、平生普通人と少しも變らなくて、時々發作すると荒つぽくなるのださうだ。

十七八に見える娘で、相當な娘らしい姿をした女がゐる。此女は、非常に讀書家で、毎月盛んに雑誌を亂讀する。此娘に云はせると、

「私のお父さんは狒々の化物で、お母さんは龍女、世界中の人は龍女の子です。」

と云ふ。それから、

「お前さんは、」

と聞くと、怖い顔をして、

「私は神様の子で、皇族の親類だ。嘘と思ふなら、今月の皇族畫報を御覽なさい。私の寫眞がちゃんと口繪に出て居ります。」

など、云ふ。



(十七) 錢勘定と日の勘定

二百六十餘人の精神病者の中、私費を拂つて、一間々々を占領してゐる人達は別として、警察や、區役所から押付けられた患者は、廣間へ五人六人づゝ雑居してゐる。此の部屋前の廊下に立つと、男の患者たちは、迂散くさい目を見張つて、私をぢろく／＼見るが、女の患者は、丁寧にお辭儀をするものあり、ニコ／＼として跟いて來るものもあり、餘程人懐こい。そして少し此方が甘い顔を見せると、直ぐに、手を伸ばして此方の身體に觸りたがる。

男の方は、全然互に没交渉で、壁際にびつたり坐つて、無言の行をしてゐるのもあれば、相手をなしに睨みつけて、罵倒してゐるものもあり、ゲラ／＼笑ひをするもの、考へ事をしてゐるものなど、只ガヤ／＼として氣味が悪く、雜然として賑やかである。

其中に三人ほど固まつて、頻りに錢勘定をしてゐるのがある。一人が大聲で流暢に、六百何

十圓也、五百何十圓也といふやうな金高を讀み上げると、一人が精々と算盤を弾いてゐる。何の勘定をしてゐるか聞くと、これは、金高の勘定ではなく、手間仕事に與へられた狀袋貼の袋の數をメめ上げてゐるのださうだ。この人たちの張つた狀袋は、狀袋屋から、千枚三錢五厘で、引受けてあるので、三錢五厘の中から、五厘は糊代、其他の雜費が出、三錢はそつくり貼つた人の貯金になる。だから、器用なのは、一日に四千枚以上も貼るので、十二三錢から十四五錢は樂に儲けて行く。此の貼賃は、病院が預かつて置いて、通ひ帳を本人に渡して、收支を明かにしてやるのださうだ。以前は現金で渡したが、現金を持たせると、動もすれば、それを旅費にして、逃げ出す工夫をしたがるから、以來は絶対に、現金を持たせぬ事にしたといふ。

すべての事は、精神錯亂ではあるが、金の勘定となると、十人が十人、非常に慥ださうだ。此點だけは、お釋迦様でも、中々狀袋一枚だつて、誤算を許さないといふから面白い。

私が逢つて話をしたすべての狂人が、何れも、自分の入院した月日とか、持つてゐる金の勘



定などを、よく／＼知つてゐて、決して／＼間違つた事がないのを見ても判る。他の事で氣が違つても、錢勘定だけは、狂はぬものと見える。

それから、狂人の特徴としては、食ひ物が亂暴になつて、身體が非常に丈夫になるらしい。随分患者によつては、看護婦の目を忍んで、手當り次第に、ものを食べる事があるけれど、嘗て食當りをした事が無いといふ。

### (十八) 悲惨な發狂

三重縣の人で、瀧爪何某といふ四十男がある。この人が發狂して、此戸山腦病院へ入れられるまでに、面白い來歴がある。此人は、女房何某との間に生んだ娘が、病氣になつたのを治療してやりたくも、貧乏の爲め、買ひ藥をして養生するより道はなかつたところが、病氣は案外に重くて、買藥などでは追付かなくなつた爲め、村の醫者へかけた。醫者は腦膜炎と診察した

が既に手遅れで、手の付けやうがなかつたらしい。兎に角、藥はあげるが、これで癒つたら、煎豆に花が咲くほどのものであらうと云つて歸つた。

其晩娘は死んだ。瀧爪は娘を亡つた悲しみから、醫者を恨んだ。寧ろ煎り豆に花と云つた醫者の言葉に反感を持つた。果は娘の死んだのもあの醫者が、ぞろつぺいな藥を盛つたからだと言へ思ひ定めてゐた。兎に角、死亡診断書を貰はねばならぬから、醫者へ使ひをやると、この使ひと醫者との間に、どんな言葉の行違ひがあつたものか、瀧爪には藥價が八圓ほど溜つてゐるから、それを拂はなければ、診断書はやれないといふ口上を、使ひは瀧爪へ報告した。瀧爪は一層憤慨して、醫者がさういふなら、藥價は絶対に拂はない。診断書は、出るところへ出て書かせて見せるとばかり、直に警察へ驅付けた。警察では、程よく瀧爪を宥めた。村役場へ訴へた。村役場でも取なしをした。瀧爪は、娘の屍骸へ毛布を冠せた儘にして置いて、三重縣廳へと持出した。裁判所へも持出した。併し、何處でも筋違ひの沙汰として、程よく剋つけられて了つた。



瀧爪の初一念は、何處までも承知しない。警へ自分の身を捨て、も、彼奴に診断書を書かせて見せるといふので、土地の新聞社へ泣きついた。新聞は忽ち瀧爪に同情し、三四日に亘つて醫者攻撃を始めた。其中、村内でも醫者に同情する連中があつて、十九人連名で、其の新聞に醫者の爲め辯解の廣告を、一段打抜きで掲載する事になつた。瀧爪は、又其の廣告の取消を求めて、十九人を歴訪した。結局、醫者は罰金刑に處せられたが、瀧爪は其様事で承知しなかつた。そして、尙運動を續けてゐたが、もう村では相手にせず、新聞もいつの間にか、瀧爪を氣遣ひ扱ひにするやうになつたので、瀧爪は、出先から其儘上京して、司法省へ出頭した。恐れながら、司法省へ差出した封書の中には、自分の事に關係して書かれた新聞の切抜全部と代書人に書かした陳情書と、此人は氣違ひでは無之候と書いた村の人の證明書と、娘の死際に、醫者が盛つた薬の包が入つてゐた。

### (十九) 新醫術の發明者

全く瀧爪は、何時發狂したか判らない中に發狂したのである。そして、司法省へ願ひ出た目的は、飽くまでも、醫者が死亡診断書を書くやうに説諭してくれといふ事と、醫者が調査した薬は、娘を殺す毒薬に相違ないから、分析検査をしてくれといふ事の二ヶ條である。併し氣違ひには相違ないのだから、やがて其の筋の手にかゝつて、この戸山脳病院へ送られたわけだ。そして、人の顔さへ見れば、診断書がほしい。診断書がほしいと、口説き立て、頻りに法律論を振まはしてゐる。

良人が、こんな悲惨な有様になつてゐるとも知らず、國許にゐる女房は、只戸山脳病院内瀧爪某と書いて寄越した良人の手紙を見て、妻や子供は放り出して、自分だけ脳病の養生などゝ入院治療をしてゐるとは餘りだと、恨みの手紙を再三寄越した末に、苦しい中から、あるかな



しの旅費で、先日わざ／＼乞食の如き姿に、赤ん坊を負つて上京して、病院へ良人を訪ねた

さうだが、良人は發狂してゐる事を、始めて知つて、がっかりしながら、歸國したさうだ。

此の病人に逢つて、私は其の憤慨論を聞かうとしたが、此人は女房と逢つて以來、不機嫌勝  
で何を云つても、返事さへしないので、ふくれてゐる。

其處へ、横合から、私を新聞記者と知つて、身を進ました髯の生へた老人がゐる。

「私は、木の葉が、あらゆる病氣を治し得るといふ事を發見しましたから、社會に發表して下  
さす。」

と云ひ出す。これは面白いと、早速別室へ連れて行つて、其大發明といふのを聴聞する。

「私の考へてゐる醫學上の意見は、非常に範圍が廣いから、それを皆云ふわけには行きませ  
ん。ですから、今日は脳病についてのみ話させよう。」

と真直に立つて、演説口調で説き立てる。

座には、院長橋健行氏も居たが、此老人は、先づ橋氏の顔を眞向に見て、

「一體、この病院の用ひてゐる治療法は、間違つてゐます。」

と怒鳴つた。

「何處が違ひます。」

と橋氏が柔かに尋ねると、

「全然間違つてゐる。此の病院ばかりではない。現代の醫者は、悉く間違つてゐる。そもそ  
も病氣といふものは、腹にもあり、頭にもあり、足にも手にも起る。それに對して、今の醫  
術は、何處の病氣でも、悉く口から藥を注ぎ込んで、腹に納めて、それで、病氣を治さう  
としてゐる。其様迂闊な馬鹿氣た事をして、病氣が治るものですか。其處で、私の意見の一  
部分を貴郎方に教へて上げませう。すべて病氣といふものは、起つた場所へ、直接に治療を  
施さなければならぬ。こゝでは、脳病についてだけ話すとするが、脳といふものは、前腦  
と後腦とある。前腦は、腹へ下つて來て悪くなり、後腦は、足に下るものです。」



(二十) 木の葉は萬病の藥

大發明家の目付が、話の進むに従つて、眉毛の奥の方で光り始める。大發明家の目は、怖ろしいほど凹んでゐる。そして、鼻の下の眞黒い髭に、鼻息がポツ／＼とかゝる。

「すべて人間の病氣といふものは、皮膚の下のあま皮のところに、瓦斯が溜る爲めに起るのでこの溜つた瓦斯、即ち前脳にたまれば、腹へ下り、後脳に溜れば、足の踵にたまります。そして溜つた場所で、瓦斯の凝塊が出来て、それが病氣となるのだから、瓦斯の凝塊を崩して了へば、病氣は治るわけです。かういふ秘法のある事を、今の醫術界では、誰一人知らない。實に私は氣の毒に思ひます。」

「それで、其の瓦斯の凝塊をくづす方法を、貴郎は考へたんですか。」

「考へました。それを崩すのは、總ての木葉です。世界中の樹木といふものは、人の病氣を

治す爲めに、青葉を枝につけてゐるのです。私はこれほどの發見を、此儘にして置くは、國家の爲めに惜しいと思ひました。私はそれまで、大阪にゐましたが、兎に角、東京の醫學界へ發表して批評もして貰ひ、研究してもらひたいと思ふので、大阪を出發しました。尤も長い旅行の事ですから、私は和服の上に、將校マントを被て、其胸中に兵兒帶をしめてゐました。誠に我ながら、妙な風體だと思つた位だから、世間の人の目に、氣狂ひと思ひ誤られたのも、無理はないと思ひます。併し旅行の事ではあり、且私は貧乏でしたから、ナニ表面は、どんな身姿でも、頭には大發明を貯へてゐると思へば、天地に俯仰して恥しい事はありません。私は堂々と歩いて、品川まで來ますと、往來から見える或家の庭に、薔薇の垣根がありました。私の研究によると、薔薇の葉は、臭氣を取り去る卓効を持つて居ります。而も其の庭の薔薇の葉は、非常に粒が揃つてゐます。あゝこれほど卓効藥がありながら、打捨て置くのは、惜しいものだと思つて、暫らく研究を續けました。實物についての研究を、一通り済ますと、愈々實驗の方にとりかかからねばなりません。幸ひ私の着物は、大阪から着て來



た儘ですから、大分汚れてゐる。殊に悪臭が紛々としてゐますから、この薔薇の葉で、臭みを除つて了ませうと思ひました。薔薇の葉で物の臭味をとるのは、臭ひものを、二三分薔薇の葉の傍へ持つて行けば、それで宜しいのです。私は二三分間の辛抱だと思ひましたから、着物を上から下まで、すつかり脱いで、薔薇の上へそつくり被せて、裸の儘、側で待つてゐました。すると巡査が来て、私を非常に怒鳴りつけました。どうせ巡査風情ですから、私の實驗醫學の説明をしたつて、判りはいたしません。私は黙つて、巡査の顔を見てやりました。」

## (二十一) 巡査は物知らず

併し巡査の見幕は益々荒い。早く私に着物を着て、其處を立去れと申します。お前の着物だつて、随分臭いから、ここで臭味を除つてやらうかと、私は餘程教へてやりたかつたが、巡査

をする位な、物知らずに教へてやつたところで仕方がないから、素直に着物を着て其場を立去りました。すると、品川の青物市場の前へ出ました。見ると、市場の若い者が、甘菜を揃へるので、外側の汚れた葉を、ドン／＼捨て、内側の若いところだけを、籠に入れてゐます。それは世間普通のやり方ですが、私の目から見ると、實に勿體ない話です。私は思はず立止まつて見た。「古い葉を捨てるのが何故勿體ない」「なるほど貴郎方は知るまい。甘菜といふものは古い葉の方に夥しい滋養分があるので、若葉の方には何もないのです。」「あゝさうですか。してみると勿體ない。」「さうでせう。知らないから惜氣もなく捨てるが、知つてる私から見ると勿體ない。」「私は其の捨てた葉の香を、一々調べ始めた。私は元來貧乏なのだから、私の研究資料に金をかける事が出来ない。かういふ場合に、捨つたもので研究をするのが、絶好の機會なのだから、私は一々調べてゐると、茲にも馬鹿野郎がゐて、市場の若い者が私を追拂つて了ひます。」

「一寸待つて下さい。甘菜の葉は、一體何の藥になるんです。」



「甘菜の葉は目の薬だ。あの甘菜の古い葉を目の上へ載せて置けば、どんな目でも直ぐ治つて了ひます。それを知らないから、どうも困ります。それから私は、甘菜を嗅ぎながら、不圖考へた事があります。私の發明は、醫學博士に教へてやると共に、藥學博士にも教へてやらなければならぬ。兎に角、東京で一番偉い藥學者に逢ふ必要があると思ひましたから、青物市場の向ふ側にある交番に行つて、東京で一番偉い藥學士が、此邊に居りませんかと聞きました。すると、此交番の巡查は、私が青物市場で、甘菜を拾つて嗅いでゐたのを、先刻から見てゐて、迂散に思つたに相違ないのです。私を陥れる氣でかういふ事を云ひました。藥劑學者ならば、非常に好都合な事がある。私の詰めてゐる警察の警部さんが、非常に藥學の研究に熱心だから、紹介をしてあげやう。あの警部に逢へば、慥に得るところがあるに相違ないとかういふのです。私は嘘だと思つた。警部などといふ忙しい職業を持ちながら、藥學の研究が出来るわけのものぢやない。警部など語るに足らないとは云つて見たが、併し人の言葉をムダに聞かないのが私の特長です。兎に角、逢つて見るから紹介して呉れと云ひま

すと、其の巡查が、私を連れて警察へ引張り込みました。

## (二十二) 腦病の新療法

警察へ私を引張り込みますと、其の巡查は、私を正面に坐つてゐる警部の前へ突出しました。そして、「さアあの人が、藥劑學の研究をしてゐる警部さんだから、話をして御覽なさい。」と云ひ捨てに、引込んで了ひました。

私は、私の發見した醫術と、木の葉に對する藥劑學とに關して、大に肝膽を吐露して見やうと思つて、先づ警部の顔をぢつと見つめますと、警部も、私をぢつと見る。そして「其方は何處から來た。」と聞きますから、「大阪から參りました」といふと、「何處の生れで、名は何と申す。」と云ひますから、「鹿児島縣の生れです。」と云ひましたが、其の態度が如何にも私のやうな學者さまに對する態度とちがつて、誠に尊大ですから、私はムツとしました。併し



警部は、それに頓着しないで、いろ／＼な事を訊問します。私は癩に障るから、黙つてやりました。」

「あは／＼、其れから學者先生、この病院生活をすることになったのですね。」

「さうです。彼奴等は、人の人格といふものさへ辨へない奴等です。實に失敬です。私もかうしてゐれば、寝るにも不自由はなく、食べるものも充分ですが、それでは、私の折角の大發明を、世間へ發表する事が、一日／＼と遅れます。それが實に残念です。院長さん、どうぞ一日も早く、私を世間へ出して下さい。私の身體が世間へ出れば、私自身は、それこそ非常な難儀をします。けれども、私一人が難儀をする事によつて、世間一般が新しい醫療法を得て大に助けられるのですから、早く世間へ出して下さい。」

と云ふと、院長はニコ／＼笑つて、

「宜しい。それほどのお話があれば、早速退院の手續きをしなければならぬが、肝腎の腦病治療の話が、何處へか行つて了つたぢやありませんか。」

「腦病治療ですか。宜しい、お話しませう。腦に集まる瓦斯のかたまりを崩すのは、お尻の穴から術を施さなければならぬ。」

「成程、お尻の穴からどうするんです。」

「それは云はれない。」

「何故。」

「それを云ふと、貴郎方は、私を氣遣ひ扱ひにするからいやです。」

「いや飛んでもない。貴郎ほどの大學者を、氣遣ひ扱ひにしてたまるものですか。是非聞かして頂きたい。」

「それでは、少しばかり話して上げる。尻の周圍は十幾つの穴がある。」

「尻の穴の外にですか。」

「さうです。その穴が禦がるから、腦に瓦斯がたまるのです。だから、先づ其穴に青桐の葉を當てがひます。それで腦病は美事に治ります。」



「よく判りました。早速何とかいたしませう。」

「駄目です、く、其様事を云つて、又俺を氣違ひにして丁ふのだから。其の手は喰ひません。私の言葉を信用さへすれば、この病院の患者は、皆治つて丁ふのだが。」と云ひ捨てに、學者先生は姿を隠して了つた。

### (二十三) 狂女の大部屋

私はいろくの狂人に逢つた。始めは随分氣味が悪かつたが、もうこの通り十人以上の狂人と面會すると、格別怖しくもなく、氣味が悪くもないやうになる。

此勢ひで、私は最後の面會として、女部屋の方へ入つて見やうと思ふ。元來男の狂人は飛び付かれてもしさうで怖く、女の狂人は、何となく不氣味といふ形がある。怖いのは、看護人がついてゐてくれるから、防ぎがつくとしても、不氣味なのは、看護人の力でどうする事も出

来ない。其意味で、私は女の部屋へ入る事を遊つてゐたが、もう馴れたといふ勢ひで、ずつと入る。

大部屋の方の女達は、思ひ思ひに陣取つて、熱心に麻糸つなぎをしてゐる。皆が皆、髪を大童にしたり、切禿にしたり、櫛まきにしたり、或ひは大束髪に結つたりしてゐる。着物は大抵筒袖である。結つてゐても、切つてゐても、女の髪といふものは、物凄く見せるものだ。

私は怖々足を運んでゐると、

「モシモシ。」

と呼びかけて、丁寧に頭を下げる女がある。廣島まで男を追ひかけて行つて、逢へない爲めに發狂した年増女である。

「貴郎は随分酷いわ。あんな事を新聞に書いて、私きまりが悪くて、仕様がないますよ。だけど、書くなら、まだく澤山話があるの、幾許でも書いて下さう。」  
といふ。此の女は、私を新聞記者と看破つた女である。



其聲を聞附けて驅出したのは、徳川さんのお妾と稱する盲だつた。

「おい貰入をおくれよ。そして、私を出しておくれよ。阿部リツシに逢ひたいんだよ。」

「阿部リツシといふのは何だえ。」

「阿部リツシは私の子供さ。色男ぢやないんだよ。早く貰入をおくれよ馬鹿ッ。」  
と大分氣が荒い。

すると、横合から、私の下腹をボンとついた女がある。私は吃驚すると眞黒い顔を突出して  
「よう叔父さん。お虎ちゃんを早く身請しておくれよ。何時身請するの。私は待つてゐるんだよ。ねえ叔父さん。」

と両手を握つて、振りまはしながらの大騒ぎ、私はこのお虎ちゃんに困却してゐると、十六七の小娘が、そつと、私の目の前へ顔を差出して、

「新婚旅行をませうよ。」  
と泣聲を出す。

又其横から、丁寧にお辭儀をして、

「先日はいろく失禮をいたしました。どうぞ悪しからず。」

といふのが、モヒの中毒で發狂した女。

一番奥には、年増の小綺麗な人が居て、

「看護婦さん。疊の下から、お尻を突つて困るんですがね。何とかして下さらなければ、病院の體面に關係させう。」

と訴へる。

「下から突つくとは何者です。」

「皆知つた人なんです。皆寄つてたかつて突つくんです。」

「寝てる時ですか。」

「起きてても立つてても。」

「何で突つくんです。」



「魔術で突つくんですよ。」  
と此んな話を聞いてる間にも、前のお虎ちゃんたちは、悉く私を取まいて、思ひく／＼に手を出して来る。私は一目散に振切つて逃げ出した。

### 精神病院法

(大正八年三月  
法律第二十五號)

第一條 主務大臣ハ北海道又ハ府縣ニ對シ精神病院ノ設置ヲ命スルコトヲ得

第二條 地方長官ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル精神病者ヲ前條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ニ入院セシムルコトヲ得

一 精神病者監護法ニ依リ市區町村長ノ監護スヘキ者

二 罪ヲ犯シタル者ニシテ司法官廳特ニ危険ノ虞アリト認ムルモノ

三 療養ノ途ナキ者

四 前各號ニ掲クル者ノ外地方長官特ニ入院ヲ必要ト認ムル者

前項ノ規定ニ依リ精神病者ヲ入院セシムルニハ命令ノ定ムル所ニ依リ醫師ノ診斷アルコトヲ要ス

第三條 國庫ハ勅令ノ定ムル所ニ從ヒ第一條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ノ經費ニ對シ六分ノ一乃至二分ノ一ヲ補助ス

第四條 第一條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ノ長ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ入院者ニ對シ監護上必要ナル處置ヲ行フコトヲ得

第五條 地方長官ハ入院者ヨリ入院費ノ全部又ハ一部ヲ徵收スルコトヲ得地方長官入院者ヨリ徵收スルコトヲ得ズト認ムルトキハ其ノ扶養義務者ヨリ之ヲ徵收スルコトヲ得

前項費用ノ徵收方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 道府縣ニ於テ設置スル精神病院ニシテ地方長官ノ具申ニ依リ主務大臣ニ於テ適當ト認ムルモノハ第一條ノ規定ニ依リ設置スルモノト看做ス

第七條 主務大臣必要ト認ムルトキハ期間ヲ指定シ適當ト認ムル公私立精神病院ヲ其ノ承諾ヲ得テ第一條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ニ代用スルコ



トヲ得此ノ場合ニ於テハ第二條乃至第五條ノ規定ヲ準用ス

第八條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ執行ニ關シ行政官廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴願スルコトヲ得行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ各條ニ付之ヲ定ム

精神病院法ノ一部施行期日

ノ件 (大正八年八月勅令) (第三百六十五號)

精神病院法第七條ノ規定ハ大正八年八月十日ヨリ之ヲ施行シ同法第一條乃至第五條及第八條ノ規定ハ同法第七條ノ規定ノ施行ニ必要ナル範圍ニ於テ同日ヨリ之ヲ施行ス

精神病院法ニ依ル代用精神病院ノ國庫補助又ハ入院費ノ徵收方法ニ關スル件

(大正八年八月勅令) (第三百六十六號)

第一條 國庫ハ北海道地方費又ハ府縣カ精神病院法第七條ノ規定ニ依ル代用精神病院ニ對シ支出シタル入院費ノ精算額ノ六分ノ一ヲ北海道地方費又ハ府縣ニ補助ス但シ北海道地方費又ハ府縣カ入院費又ハ入院費ニ充ツヘキ寄附金ヲ受クルトキハ其ノ金額ヲ精算額ヨリ控除ス

第二條 精神病院法第七條ノ規定ニ基キ同法第五條第一項ノ規定ニ依リ徵收スル入院費ヲシテ指定期限内ニ納付ナキモノニ付テハ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ徵收スルコトヲ得

第三條 入院費ノ徵收ハ必要アルトキハ納付義務者ノ居住地又ハ財産所在地ノ地方長官ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第四條 精神病者入院中死亡シタルトキハ其ノ遺留財産ヲ以テ入院費ノ全部又ハ一部ニ充ツルコトヲ得

附則

本令ハ大正八年八月十日ヨリ之ヲ施行ス

精神病院法第七條ノ規定ニ依ル代用精神病院ニ關スル件 (大正八年八月) (內務省令第七號)

第一條 精神病院法第七條ノ規定ニ基キ同法第二條

第二項ノ規定ニ依ル診斷ハ地方長官ノ指定シタル醫師ヲシテ之ヲ爲サシムヘシ

第二條 市區町村長ハ精神病者監護法ノ規定ニ依リ

監護スヘキ精神病者ノ入院ヲ地方長官ニ申請スルコトヲ得

第三條 精神病者ノ監護義務者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ精神病者ノ入院ヲ地方長官ニ出願スルコトヲ得

第四條 地方長官ハ入院者在院ノ必要ナシト認ムルトキハ速ニ退院セシムヘシ此ノ場合ニ於テハ豫メ當該代用精神病院長ノ意見ヲ徵スルコトヲ要ス

第五條 入院者ノ監護義務者ハ入院者ノ退院ヲ地方長官ニ出願スルコトヲ得

第六條 精神病院法第七條ノ規定ニ基キ同法第四條ノ規定ニ依リ代用精神病院ノ長ノ入院者ニ對シテ行フヘキ監護上必要ナル處置ニ付テハ內務大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第七條 精神病院法第七條ノ規定ニ基キ同法第二條及本令ノ規定ニ依ル地方長官ノ職務ハ東京府ニ在リテハ東京府知事及警視總監之ヲ行フ

附則



本令ハ大正八年八月十日ヨリ之ヲ施行ス

### 精神病患者監護法

(明治三十三年三月十日法律第三十號)

- 第一條 精神病患者ハ其ノ後見人配偶者四親等内ノ親族又ハ戸主ニ於テ之ヲ監護スルノ義務ヲ負フ但シ民法第九百八條ニ依リ後見人タルコトヲ得サル者ハ此ノ限ニ在ラス
- 監護義務者數人アル場合ニ於テ其ノ義務ヲ履行スヘキ者ノ順位ハ左ノ如シ但シ監護義務者相互ノ同意ヲ以テ順位ヲ變更スルコトヲ得
- 第一 後見人
- 第二 配偶者
- 第三 親權ヲ行フ父又ハ母
- 第四 戸主
- 第五 前各號ニ掲ケタル者ニ非サル四親等内ノ親

族中ヨリ現族會ノ選任シタル者

- 第二條 監護義務者ニ非サレハ精神病患者ヲ監置スルコトヲ得ス
- 第三條 精神病患者ヲ監置セムトスルトキハ行政廳ノ許可ヲ受クヘシ但シ急迫ノ事情アルトキハ假リニ之ヲ監置スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ二十四時間内ニ行政廳ニ届出ヘシ
- 前項假監置ノ期間ハ七日ヲ超ユルコトヲ得ス
- 行政廳ノ許可ヲ受ケテ監置シタル精神病患者ノ監置ヲ廢止シタル後三箇年内ニ更ニ之ヲ監置セムトスルトキ又ハ民法第九百二十二條ニ依リ禁治産者ヲ監置セムトスルトキハ行政廳ニ届出ヘシ
- 第四條 精神病患者ノ監置ノ方法又ハ場所ヲ變更シタルトキハ二十四時間内ニ行政廳ニ届出ツヘシ
- 第五條 監置シタル精神病患者治癒シ死亡シ若ハ行方不明ト爲リタルトキ又ハ其ノ監置ヲ廢止シタルトキハ七日内ニ行政廳ニ届出ヘシ

- 第六條 精神病患者ヲ監置スルノ必要アルモ監護義務者ナキ場合又ハ監護義務者其ノ義務ヲ履行スルトコト能ハサル事由アルトキハ精神病患者ノ住所、住所地方ナキトキ又ハ不明ナルトキハ其ノ所在地市區町村長ハ勅令ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ監護スヘシ
- 第七條 行政廳ハ精神病患者ノ監護ニ關シ必要ト認ムルトキハ監置ノ許可ヲ取消シ監置ノ廢止ヲ命シ又ハ監置ノ方法若ハ場所ヲ變更ヲ命スルコトヲ得
- 監置ノ許可ヲ取消サレ又ハ其ノ廢止ヲ命セラレタル者監置ヲ廢止セサルトキハ行政廳ハ直接ニ監置ヲ廢止スルコトヲ得
- 第八條 精神病患者監置ノ必要アルトキ又ハ監置不適當ト認ムルトキハ行政廳ハ第一條第二項ノ順位ニ拘ラス監護義務者ヲ指定シ之ヲ監置ヲ命スルコトヲ得但シ急迫ノ事情アルトキハ行政廳ハ假リニ其ノ精神病患者ヲ監置スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ第三條第二項ノ規定ヲ準用ス

- 市區町村長ニ於テ監護スル精神病患者ノ監護義務者ヲ發見シ又ハ監護義務者其ノ義務ヲ履行シ得ルニ至リタルトキ亦前項ニ同シ
- 本條ニ依リ精神病患者ノ監置ヲ命セラレタル監護義務者其ノ命ヲ履行セサルトキハ第六條ノ例ニ依リ市區町村長ニ於テ之ヲ監護スヘシ
- 本條ニ依リ監護義務者ノ監置シタル精神病患者ニ關シテハ行政廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其ノ監置ヲ廢止シ又ハ監置ノ方法若ハ場所ヲ變更スルコトヲ得ス
- 第九條 自宅監置室、公私立精神病院及公私立病院ノ精神病室ハ行政廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス
- 自宅監置室、公私立精神病院及公私立病院ノ精神病室ノ構造設備及管理方法ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十條 監護ニ要シタル費用ハ被監護者ノ負擔トシ



被監護者ヨリ辨償ヲ得サルトキハ其ノ扶養義務者ノ負擔トス

市區町村長ニ於テ監護スル場合ニ於テ之カ爲要スル費用ノ支辨方法及其ノ追徴方法ハ行旅病人及行旅死亡人取扱法ノ規定ヲ準用ス

第十一條 行政廳ハ必要ト認ムルトキハ其ノ指定シタル醫師ヲシテ精神病者ノ檢診ヲ爲サシメ又ハ官吏若ハ醫師ヲシテ精神病者ニ關シ必要ナル尋問ヲ爲サシメ又ハ精神病者在ル家宅病院其ノ他ノ場所ニ臨檢セシムルコトヲ得

第十二條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ執行ニ關シ行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十三條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ執行ニ關スル行政廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第十四條 官吏公吏又ハ行政廳ノ命ヲ受ケテ公務

ヲ行フ醫師本法ノ執行ニ關シ不正ノ所爲ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十五條 官吏公吏又ハ行政廳ノ命ヲ受ケテ公務ヲ行フ醫師本法ノ執行ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ刑法第二百八十六條ノ例ニ照ラシテ處斷ス

第十六條 左ニ掲クル者ハ一年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

一 詐僞ノ所爲ヲ以テ行政廳ノ許可ヲ受ケ若ハ虛僞ノ届出ヲ爲シ精神病者ヲ監置シ又ハ拘束ノ程度ヲ加重シタル者

二 醫師精神病者ノ診斷書ニ虛僞ノ事實ヲ記載シ又ハ自ら診斷セスシテ診斷書ヲ授與シタル者  
前項第一號ノ場合ニ於テハ監置又ハ拘束ノ日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第十七條 左ニ掲クル者ハ二月以下ノ重禁錮ニ處シ

二十圓以下ノ罰金ヲ附加シ又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス但シ監置又ハ拘束ノ日數十日ヲ過クル毎ニ一  
等ヲ加フ

一 許可ヲ受ケス又ハ届出ヲ爲サス若ハ命ヲ受ケスシテ精神病者トシテ人ヲ監置シタル者

二 禁治産ノ宣告又ハ監置ノ許可ヲ取消サレ又ハ監置ノ廢止ヲ命セラレ若ハ假監置ノ期間ヲ經過シタル後監置ヲ廢止セサル者

三 許可ヲ受ケ又ハ届出ヲ爲シ若ハ命ヲ受ケタル程度ヲ超エテ精神病者ヲ拘束シタル者

第十八條 左ニ掲クル者ハ一月以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以下ノ罰金ヲ附加シ又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

一 精神病者ノ監置ニ關シ虛僞ノ事實ヲ記載シタル願届其ノ他ノ書類ヲ行政廳ニ提出シタル者  
二 監置義務ヲ履行スヘキ順位ニ在ラサル者ニシテ許可ヲ受ケス又ハ命ニ依ルニ非スシテ監置ヲ

廢止シ又ハ監置ノ方法若ハ場所ヲ變更シタル者

三 官吏又ハ行政廳ノ指定シタル醫師ノ臨檢若ハ檢診ヲ拒ミ又ハ其ノ尋問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛僞ノ答辯ヲ爲シタル者

第十九條 左ニ掲クル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 監置ノ方法若ハ場所ノ變更ヲ命セラレ其ノ命ヲ履行セザル者

二 監護義務者精神病者ノ監置ヲ命セラレ其ノ命ヲ履行セザル者

三 第八條第四項及第九條第一項ニ違背シタル者  
第二十條 第四條及第五條ニ違背シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第二十一條 本法ハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ヨリ精神病者ヲ監置シタル者ニシテ仍之ヲ繼續セムトスルトキハ本法施行ノ日ヨリ二箇



月内ニ第三條ノ許可ヲ受ケ又ハ届出ヲ爲スヘシ第三條ノ許可ヲ受ケス又ハ届出ヲ爲サスシテ前項ノ期間ヲ經過シタル後監置ヲ廢止セサル者ハ第十七條ノ例ニ照シテ處斷ス

本法中市區町村長ニ屬スル職務ハ市制區制町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ市區町村長ニ準スヘキ者之ヲ行フ

第二十二條 外國人タル精神病者ノ監護ニ關シ別段ノ規定ヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十三條 人事訴訟手續法第五十條又ハ第六十條ニ依リ裁判所ニ於テ精神病者ノ監護ニ付必要ナル處分ヲ命シタル場合ニ關シテハ本法ノ規定ヲ適用セス

### 精神病者監護法施行規則

(明治三十三年六月二十八日  
內務省令第三十五號)

第一條 精神病者監護法第一條第二項但書ニ依リ監護義務者ノ順位ヲ變更シタルトキハ關係者ハ七日内ニ連署ヲ以テ警察官署ヲ經テ地方長官ニ届出ヘシ

第二條 精神病者監護法第一條第二項第五號ニ依リ監護義務者ヲ選任シタルトキハ親族會ハ七日内ニ警察官署ヲ經テ地方長官ニ届出ヘシ

第三條 精神病者監護法第三條ニ依リ精神病者ヲ私宅病院其ノ他ノ場所ニ監置セムトスルトキハ監護義務者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ警察官署ヲ經テ地方長官ニ届出又ハ届出ヘシ

第三條第一項但書ニ依リ精神病者ヲ監置シタルトキハ監護義務者ハ警察官署ニ届出ヘシ此ノ場合ニ於テハ醫師ノ診斷書ヲ添フルコトヲ要セス

第四條 精神病者ヲ監置セムトスル場合ニ於テ地方長官ノ許可ヲ受クルノ暇ナシト認ムルトキハ監護義務者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ警察官署ニ届出ヘシ

前項ノ場合ニ於テハ監護義務者ハ三十日内ニ前條ニ依リ更ニ地方長官ニ届出ヘシ

第五條 前二條ノ届出又ハ届出ヲ爲ス場合ニ於テハ監置ノ方法及場所ヲ記シ若シ私宅監置室ヲ設クルトキハ其ノ構造設備ヲ記シタル書類ヲ添付スヘシ

第六條 本則第四條第一項ニ依リ監置シタル精神病者ニ關シ三十日内ニ地方長官ニ監置ノ届出ヲ爲サルトキ又ハ地方長官ニ於テ届出ニ對シ不許可ノ處分ヲ爲シタルトキハ警察官署ノ與ヘタル許可ハ取消サレタルモノトス

第七條 精神病者監護法第四條又ハ第五條ノ届出ハ監護義務者ニ於テ醫師ノ診斷書又ハ檢案書ヲ添ヘ警察官ヲ經テ地方長官ニ之ヲ爲スヘシ但シ行方又不明ノ場合ニ於テハ醫師ノ診斷書又ハ檢案書ヲ添フルコトヲ要セス

本則第四條第一項ニ依リ監置シタル精神病者ニ關シテハ前項ノ届出ハ警察官署ニ之ヲ爲スヘシ

第八條 私宅監置室ハ精神病者ノ資産又ハ扶養義務者扶養ノ程度ニ應シ相當ノ構造設備ヲ爲シ及之ヲ管理スルコトヲ要ス

第九條 府縣立ヲ除ク外公私立精神病院及公私立病院ノ精神病室ヲ設置セムトスルトキハ其ノ構造設備及管理ニ關スル事項ヲ具シ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ其ノ之ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

第十條 精神病者監護法第七條及第八條行政廳ノ職權ハ地方長官之ヲ行フ但シ急迫ノ事情アルトキハ警察官署ニ於テ之ヲ行ヒ直ニ地方長官ノ指揮ヲ請フヘシ

第十一條 精神病者監護法第九條第一項行政廳ノ職權ハ地方長官之ヲ行フ但シ私宅監置室ニ關シテハ警察官署之ヲ行フ

第十二條 精神病者監護法第十一條行政廳ノ職權ハ內務大臣地方長官又ハ警察官署之ヲ行フ

第十三條 本則第九條ニ違背シタル者ハ十圓以下ノ



罰金ニ處ス

第十四條 本則第一條及第二條ニ違背シタル者ハ一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十五條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

### 精神病院法施行規則

(大正十二年六月  
内務省令第十七號)

第一條 精神病院法第一條ノ規定ニ依リ精神病院ノ設置ヲ命セラレタル北海道又ハ府縣ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ精神病院ノ位置設計及其ノ收容人員ヲ定ムヘシ其變更ニ付亦同シ

第二條 市町村長又ハ町村制ヲ施行セサル地ニアリテハ町村長ニ準スヘキ者ハ精神病者監護法ノ規定ニ依リ監護スヘキ精神病者ノ入院ヲ地方長官ニ申請スルコトヲ得

第三條 精神病者ノ監護義務者ハ醫師ノ診斷書ヲ添

ヘ精神病者ノ入院ヲ地方長官ニ出願スルコトヲ得

第四條 精神病院法第二條第二項ノ規定ニ依ル診斷ハ地方長官ノ指定シタル醫師ヲシテ之ヲ爲サシムヘシ

第五條 地方長官ハ入院者在院ノ必要ナシト認ムル

トキハ速ニ退院セシムヘシ此場合ニ於テハ豫メ當該精神病院ノ長ノ意見ヲ徵スルコトヲ要ス

第六條 入院者ノ監護義務者ハ入院者ノ退院ヲ地方長官ニ出願スルコトヲ得

第七條 精神病院法第四條ノ規定ニ依リ精神病院ノ長ハ入院者ニ對シテ行フヘキ監護上必要ナル處置

ニ付テハ内務大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第八條 精神病院法第二條及本令ノ規定ニ依ル地方長官ノ職務ハ東京府ニ在リテハ東京府知事及警視

總監之ヲ行フ

第九條 本令第二條乃至條八條ノ規定ハ精神病院院

法第七條ノ規定ニ依ル代用精神病院ニ關シ之ヲ準用ス

本令ハ大正十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス



## 公立精神病院及私立代用精神病院

### 第一 公立精神病院

府縣名	病院名	所在地	院長名
東京	松澤病院	東京市世田谷區北澤町三丁目一四一八	內村祐之
大阪	中宮病院	大阪府北河內郡山田村	小關光尙
神奈川	芹香院	神奈川縣鎌倉郡永野村	林能昭
愛知	愛知精神病院	名古屋市東區田代町字金兒谷七四	△兒玉昌
福岡	筑紫保養院	福岡縣筑紫郡太宰府町字君畑	新名常造
鹿兒島	鹿兒島保養院	鹿兒島縣鹿兒島郡中郡宇村	佐藤幹正



第二 代用精神病院

府縣名	病院名	所在地	院長名
東京	根岸病院	東京市下谷區下根岸町五一	松村清吾
	王子腦病院	東京市瀧野川區西ヶ原町八八九	小峰茂之
	保養院	東京市豐島區西巢鴨町四丁目四一四	池田隆德
	加命堂腦病院	東京市城東區龜戸町九丁目二八七	奈良林秀彌
	井村病院	東京市澁谷區幡ヶ谷町九〇七	井村忠太郎
	青山腦病院	東京市世田谷區松原町四丁目三〇〇	齋藤茂吉
	烏山腦病院	東京府北多摩郡千歲村烏山一七九六	森崎半治
	井ノ頭病院	東京府北多摩郡三鷹村上連雀	宇田儉一
	小林病院	東京府南多摩郡淺川町上長房二七一	×小林郷三

府縣名	病院名	所在地	院長名
京都	慈雲堂病院	東京市板橋區石神井關町二丁目甲七二三×堀内	守勉
	岩倉病院	京都府愛宕郡岩倉村大字岩倉町五九	土屋榮吉
	川越病院	京都市上京區淨土寺馬場町三三	川越直三郎
	京都腦病院	京都府宇治郡宇治村大字木幡小字平尾四ノ二	岡田強
	伏見分院	京都府乙訓郡新神足村字友岡小字山玉一四	合田眞澄
大阪	大阪腦病院	大阪府南河内郡志岐村大字天王屋一二九	山本友香
	濱寺病院	大阪府泉北郡高石町北五五	森本譽愛
	七山病院	大阪府泉南郡熊取村大字七山一九〇二	本多治
	堺腦病院	大阪府堺市今池町三九六	高橋清太郎
	阪本病院	大阪府中河内郡小阪町字上小阪七五五	阪本三郎
神奈川	横濱腦病院	横濱市神奈川區神大寺町字中丸九三二	竹内一







廣島	岩手	埼玉	滋賀	富山	山梨	秋田	福島
養神館病院	岩手保養院	毛呂病院	水口腦病院	富山腦病院	山梨腦病院	秋田腦病院	郡山腦病院
廣島縣佐伯郡五日市町	岩手縣岩手郡淺岸村加賀野	埼玉縣入間郡毛呂村	滋賀縣甲賀郡水口町大字水口	富山縣富山市五福字藤子四八三	山梨縣西山梨郡千塚村鹽部二九一六	秋田縣秋田市牛島大野道上段一六四	福島縣安積郡大槻村字天正垣十一
和田三郎	三浦信之	丸木清	青木亮貫	福田美明	山角彙晏	太田清之	金森五郎

以上  
公立精神病院 六  
代用精神病院 五二

備考  
△印八前戶山腦病院院長  
×印八前戶山腦病院醫員

昭和十二年四月八日印刷  
昭和十二年四月十二日發行

腦病院風景  
〔定價一圓三十錢〕

著者 杉村 幹  
發行者 黑田 茂雄  
          東京市麹町區飯田町一丁目七  
印刷者 櫻井 專吉  
          東京市牛込區山吹町一九八

發行所 北斗書房  
          東京市麹町區飯田町一丁目七  
          總發東京七三一一二  
          電話九段三八七二番



7-3826

高津正道著

# 邪教新論

最新刊 定價一圓・送料一二錢

【内容項目】○王仁三郎と大本教 ○ひとのみち教團を解剖する ○ひとのみちの眞相 ○邪宗教と貞操問題 ○搾取に耽る天理教 ○無産階級より觀たる金光教 ○生長の家その他 ○波に躍る友松圓諦たち ○友松圓諦の功罪 ○眞理運動の反動性 ○現代大衆の歩むべき道等、等、等、等。

大衆は溺れてゐる！ 救ひなき生活にあへぎ疲れた擧句、せめてもの頼みと、不覺にも所謂新しい宗教に走つた。然るにどうだ、得たり賢しとさしのべられた手は、憎むべき邪教の魔の手だつたのだ。彼等は飽くなき欺瞞と搾取と罪惡の限りを盡して最後の血の一滴までをもすすらうとしてゐる。著者憤然、全無産大衆に代つて叩きつけた爆弾こそ、即ちこれ、本書である。

## 北斗書房

東京市麴町區飯田町一ノ七  
電話九段三七八二  
振替東京七三一一二



~~53~~ 493.7  
~~434~~ SU39



終